
とある組織の気圧制御（エアロウォール）

夏の自転車

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エアロウオール
とある組織の気圧制御

【Nコード】

N7998P

【作者名】

夏の自転車

【あらすじ】

魔術という新しい敵を認識した学園都市は能力者と警備員が協力して『敵』を倒す公認組織『特警隊^{シティーバー}』を組織した。特警隊のメンバーは魔術という得体のしれないモノに巻き込まれていき……？
小説初心者ですが読んでいただけると嬉しいです

「はまなす」さんの「とある少年の魔術交差^{エンカウンター}」と世界観を共有しています。もしよければ、こちらをご覧ください。
<http://nocode.syosetu.com/n9687r/>

P r o l o g u e 発端の発端（担任からの誘い）（前書き）

初めまして夏の自転車です。初めての投稿ですが気が向いたら見てやってください

注意

初めてのため超駄文

矛盾が大発生する可能性大

超スローペース投稿

それではよろしく願います

Prologue 発端の発端（担任からのお誘い）

「シティセーバー特警隊、ですか？」

高峰颯太は聞きなれない言葉に眉をひそめた。これが担任の黄泉川愛穂から聞いたものではなければどんな都市伝説だと一蹴したかもしれない。

「そう。最近、なんだかんだで怪しい事件増えてるじゃん？それでジャッジメントアンチスキル風紀委員の選抜メンバーと警備員の選抜メンバーでチームを作って、解決にあたらうって動きになったわけ。で、そのメンバーに活動第一四七支部所属の高峰颯太くんを勧誘してるんじゃない」

「どうして自分なのか聞いていいですか？」

高峰がそう訊くと黄泉川は笑った。

「不安かい？大丈夫だって！一大能力者 レベル？ の高峰くんなら大丈夫じゃん」

無理にとは言わないけどやってくれるとうれしいな、なんて言ってるが強制力のある言い方はなんなのだろう？黄泉川はどうにかして高峰をその一特警隊 シティセーバー にスカウトしたいらしい。

興味がないかと言えばそうではない。が、めんどくさそうだ。そこまでしてやりたいかと言えばノーだ。だが、気になるといえば気になる。さて、どう答えるのが適切か。

結局、勝ったのは好奇心だった。

「わかりました、やりましょう」

「さすが高峰くん」

「ただし、条件があります」

「？」

黄泉川が首を傾げる。高峰がそれを告げると、黄泉川は高らかに笑った。

「そういうことね。それなら大丈夫じゃん。相方にはもうOKもらってるよ」

それが高峰の人生計画が狂いだした瞬間だった。

P r o l o g u e 2 発端（とある組織の始動）（前書き）

まだ本編は始まりません

気長に待っていてください

時間設定は13巻終了後SSのあたりのイメージです。

Prologue 2 発端（とある組織の始動）

「そうか、その情報は確かか」

贅沢な作りの部屋に机が一つに椅子が二脚。二人の男性が蠟燭の明かりのもと、ディナーを楽しんでいる。楽しんでいるのは一人だけだ、もう一人は客人でありながら妙にかしこまっている。

「学園都市も堕ちたな。のお、ハンス」

「は、はい」

「それを落とせぬ、ローマ正教も甘いことこの上ない」

悠々と食事を楽しんでいるこの主人はかなり絶望的な報告でありながら、ゆったりと赤ワインを揺らす。

「自ら攻められる要素を抱え込んでしまっている、か」

「しかし、抱えているものが抱えているものですので、そう簡単に攻め落とすことはできないものですが……」

「報告書の暗証は сенでいいぞ。まあ、不可能なことを請け負うのが我々、そうだろう？」

本人が出ることがないのだが、この組織の創始者だから逆らうことはできない。

「そうですが……ここだけでは相手を落とすことは難しいかと存じます。やはり、増援を呼んだ方がよろしいのでは……？」

うむ、と主人は考え込む。ハンスと呼ばれた男はこの人が考え込んでいるときに声をかけてはならないことを知っていた。

「敵の敵は味方、か。……そうだな、あれを快く思っていない連中も多いだろう。一方からじゃ攻めきれないものには両側から攻めなくてはな」

主人は赤ワインを一気に飲み干すと口の端で笑った。

「パートナーの選択はお前に任せる。頼むぞ」

「はっ、はい」

報告書の内容をハンスは思い浮かべる。

こちら側では説明不可能な『天使』の存在の確認。

学園都市とこちら側の住人との接触の確認。

何よりの問題は二人の人物の存在だった

禁書目録と幻想殺し。

ハンスはワインを飲み干すとそれらに対処するために動き出した。

P r o l o g u e 2 発端（とある組織の始動）（後書き）

次回からは本編が始まります
お楽しみに！

第一話 戦闘（ビリビリ付）（前書き）

いよいよ本編のスタートです。

読みにくい文章かもしれませんがご容赦ください。
それでは、どうぞ！

第一話 戦闘（ビリビリ付）

せっかくの土曜日なのに何が哀しくてこんなことにならずにやらないんだ、と高峰颯太は本気で思う。

いたって普通の街並み、ビルが乱立し、風力発電のプロペラがゆるりとまわっている、いつも通りの昼下がりに。

しかし今は、人影がなくながらんとしている。ちょうど五分と十一秒前に風紀委員の信号弾が撃たれ、みんな避難しているところだ。
ジャッジメント

「で、僕たちはどうやってアレに立ち向かうわけ？」

高峰の右隣で汗をダラダラ流しながらそういう相方、島田竜也が頭一つ分低いところからそういった。身長一四四センチと高校生にしては超小柄な島田は中学生にも見える。通っている学校にはさらに低い一三五センチのヘビースモーカー女教師なんているためそれほど馬鹿にはされないが、少々コンプレックスを感じている、そんな人物である。

（ま、中学生にも強い奴はいるけどね）

それがこの街、学園都市である。脳の開発をカリキュラムとして盛り込み、生徒の脳を平気で開発していき、超能力者に仕立て上げる、そんな街だ。

この都市の強弱はその能力の度合いで決まる。能力のレベルの差が、実力の差になるのである。

だからって、なんで僕がこんなのどかな昼下がりになんで超能力者（レベル？）と向き合わなくちゃならないんだ、と島田は本気で思う。

高峰は一五メートル先に立っている敵を見る。

常盤台中学二年、超電磁砲^{レールガン}の御坂美琴。

この学園都市の？3にして電撃^{エレクトロマスタ}使いの頂点に立つ少女。

「超電磁砲なら俺が防ぐ。電撃からは必死に逃げる。タイミングをみて接近して攻撃を仕掛ける。……なにか意見は？」

「なんてイケテル作戦なこと」

島田は少々あきれ気味だ。無理もない。こんなふざけた対戦カード、まずありえないのだ。なんせ相手は超能力者（レベル？）。一人で笑顔でイージス艦を撃沈させかねないようなそんな相手にどう立ち向かえばいいのか。

それが聞こえていたのか美坂美琴が右手で何かを弾いた。キン、と澄んだ音をたて、宙に飛び出したそれは綺麗な放物線を描いている。

「アンタ、この超電磁砲^{レールガン}を停めるって言ったわね？」

弾かれたのはゲームのコイン。ゆっくりと彼女の右手に戻っていく。

「じゃあ、防いでみなさい！」

コインが右手に戻った直後、オレンジ色の矢が高峰たちに飛んできた。

レールガン
超電磁砲。

金属製の物体を磁力で加速させ高速で打ち出すシステム。

音速の三倍、毎秒一〇二〇メートルで突っ込んでくるコインはその摩擦熱のせいで、五〇メートルで燃えつきる。

しかし、一五メートル先の敵を倒すのには問題ない。コンマ〇一四秒後には跡形もなく消し去ってくれる。

はずだった。

「なっ……っ？」

そこにはさつきと同じように高峰と島田が立っていた。高峰が口の端を歪めて笑う。

「なんで、一五メートルも飛ばないのか、って顔してんな？超電磁砲は不発だってわけじゃあない。でも残念。俺が誰だか忘れたか？」

「アンタは、エアロ……？……空気抵抗ね」

美坂は忌々しげに敵を見る。目の前に立っているのは大能力者（エアロウオールレベル？）の気圧制御と強能力者（レベル？）の発火能力。超電磁砲を止めたのは気圧制御だろう。気圧を操り高圧空気の壁を作っていれば、マッハ三で飛び込んでくるコインは衝撃波の壁に突っ込んだように一気に粉々である。その破片も瞬間的に摩擦熱で燃え上がるのだ。

「それじゃあ逆襲と行きますか。島田？」

高峰が叫んだのとほぼ同時、島田が指を鳴らした。その指先から炎が生まれ、美琴を包み込むように襲い掛かる。

「ちい……っ！」

美琴は再び超電磁砲を放つ。今度は衝撃波で炎を吹き飛ばすため

だ。

炎はあっけなく消え去ったが、その間に高峰、島田が距離を詰める。あと二三メートル。

美琴が電撃を放つが二人は道路の両側に停まっていた車を盾にして電撃を防ぐ。車を盾にされてしまっでは当たらない。

先に動いたのは高峰だった。路肩の車を盾にするように低姿勢で動く。電撃は車に吸い込まれてしまい高峰にはダメージゼロ。そうしている間にも距離は詰まる。あと七メートル。

（それなら！）

美琴はコインを取り出す。親指でそのコインを弾き、加速させる。あと五メートルまで迫っていた高峰に向かって打ち込む。

高峰はとっさに地面に飛び込むようにして伏せ、なんとか直撃を免れた。

（避けた？）

美琴は今の彼の行動に少し違和感を覚えた。

なぜ、高峰は超電磁砲レールガンを防がなかったのだろうか？気圧を操作すれ

ばコインも衝撃波も防げたはずだ。

（距離が近すぎて防ぎきれないとも思ったかしら）

衝撃波で車が吹っ飛ぶ。辺りに粉塵とまではいかないが砂埃が立ち込める。

これで対電撃用のシールドを取っ払うことができた。もしかしたら高峰まで一緒に吹っ飛んだかもしれない。なにせ、超電磁砲が近くを通過して無事な人間はまずいない。

一人だけ電撃や超電磁砲など方っ端から防ぎやがった怪人ウニ頭がいるが、あれは規格外だろう。

粉塵が収まると、そこに人影はなかった。

「さて……と」

美琴は周りを見回すが敵の姿は見えない。島田はまだどこかに隠れているはずだ。探しに行かなくては。

そう考え、足を踏み出したその瞬間、なぜか、フラツときた。体を支えきれず膝をつく。

酸欠のような症状だ。しかし、酸素がないわけじゃない。空気自体が薄いのだ。息を吐き出してしまえばそこに吸うべき空気はない。

「おっと、動かない方がいいぜ。死にたくないなら、な」

「？」

ほぼ無傷の高峰颯太が五メートル先ぐらいに立っている。

（そんな馬鹿な。アレ以外に超電磁砲を掻い潜る奴がいるなんて）

美琴は薄れゆく意識の中で電撃を放った。この空気の少ない状態は間違いなく気圧制御の代物だ。高峰を倒せば空気は返ってくる。今は高峰の周りに避雷針になるものはない。確実に直撃させることができる。

しかし、電撃は高峰の体をすり抜けた。その直後、高峰の輪郭がぶれて、掻き消えた。

（そんな……馬鹿な……？）

目の前の状況に困惑していた美琴は首筋に鋭い痛みを感じた。ぐらりと地面が揺らぐのを感じ、暗くなつていく視界の中で、

手刀を叩き込んだ後の高峰の姿を認めつつ、

意識は闇の中へ落ちて行った。

第一話 戦闘（ビリビリ付）（後書き）

初っ端からバトル満載でお送りしております。楽しんでいただけたでしょうか？

第二話 特警隊（シティセーバー）（前書き）

ルビの降り方など怪しいところもありますが、お付き合いいただくとうれしいです。

では、続きをどうぞ。

第二話 特警隊（シティセーバー）

「お疲れ様ですの。お姉様？」

御坂美琴は白井黒子のサポートでコードのいつぱいついたヘルメットを外すと、シートから立ち上がった。その向かいではまだヘルメットをかぶったままの島田と高峰が拳を突き合わせている。仮想空間内戦闘訓練（SCT）とはいえ、超能力者（レベル？）に勝てたのだ。

「まさか御坂さんに勝てるなんて思ってたなあ」

島田がそんなことを言うと美琴はキツと睨んだ。

「そもそも二対一でしょうが！しかも七敗したあとでしょ！まったくなんなのよ、いきなりふっと消えていきなり後ろから手刀叩き込むなんてアンタ空間移動能力者？」

「いやいや、そこは高峰と島田の涙と友情の連係プレーってやつでね」

高峰がヘルメットを外しながら言った。そのあとを島田が次ぐ。

「僕は書庫には『発火能力』バンク バイロキネシスで載ってるけど、実際には『高温着火』ホットエア・イグニッションにちかいんだけど。普通の発火能力にある『炎を操る』って能力があるのは知ってるよね？」

「アタシをなめてるの？」

美琴が髪からバツチンバツチン電撃を散らし始めたので、島田は苦笑いしてから続ける。

「そこは普通の発火能力者と同じなんだけど、着火の方法が違うんだ。掌から直接炎を生み出すんじゃないくて周りの温度を局所的に上げて自然発火させるって方法なんだ」

「で、島田の温度調整は百度ぐらいまでなら結構な量の空気を加熱できるんだよね。それを俺の『エアロオイル気圧制御』で流してやると屋気楼も相手の目測も狂わせることが可能ってわけ。以上了解？」

やられた、と苦々しげにつぶやく美琴に、高峰はとても軽いタッチで「いやー、超電磁砲で熱した空気ごと吹き飛ばされたときは焦った焦った」と言った。余裕綽々とられたのか美琴にすごい剣幕で怒鳴られていた。

「アあーン、バーチャルの世界とはいえ、凜々しいお姿かつこよかったですわよ？」

「こ、こら、黒子！テレポート空間移動による上方四五度からのフライングボディアタックなんてやめてよ？」

「いいじゃないですよ、お・ね・え・さ・ま」

このあと黒子が美琴から適度なビリビリつきの拳をもらったことは内緒である。

そしてそれを黒子が快感とってしまったことは、彼女の名誉のために黙っておこうと思う。

「美琴さんも高峰先輩も島田先輩もお疲れ様でした。それでは映像見ますか？」

三人プラス白井が打ち合わせ室ブリーフィングルームに入ると初春飾理が振り返った。セーラー服にたくさんの花飾りがついたカチューシャをつけている。あまりにも多くの花を頭に乗せているため人間花瓶にも見える。

「お疲れジャン、みんな。御坂さん、訓練に付き合ってもらっちゃって悪かったね」

そういつて奥にある椅子から立ち上がったのはこの特警隊第七学区第一班班長の黄泉川愛穂だ。この部屋には第一班の全員が集まっていた。

ほかにジャッジメント風紀委員からは重力制御の澤田一葉、グラフィティコントロール水流変動の佐川光輝、アンチスキル警備員からは宮本昂大と米田大一である。

「それじゃあ、再生しますよ？」

パソコンを操作しながら初春が言った。程なくスクリーンに市街地の映像が映し出された。距離を取って美琴と高峰、島田ペアが向かい合っている。

仮想空間内戦闘訓練（SCT）の利点は訓練の様子を俯瞰、サイド、本人の目線と異なる角度で見れることだ。その利点を駆使して先ほどの訓練を検証する。

「うわ、ホントに関係ないところ撃っちゃってる……」

高峰島田の蜃気楼作戦で超電磁砲レールガンの目測は5メートル近く遠くに狂わされていた。見当違いもいいところである。

「よくやってんじゃん。でも、このブレはきついよ」

黄泉川が指摘したのは奥のビルまで揺らいで見えることだ。必殺の超電磁砲は止められるわ、電撃は当たらないわで冷静さを欠いていた美琴は気が付かなかったが、これはかなりの異常だ。撃った後の超電磁砲の軌道まで歪んでいるため気が付けたはずだった。焦りとは恐ろしいと美琴は心底思う。

「それに相手が一人の時には有効ですが、複数になると姿をずらすのは難しいかと」

そう指摘するのは宮本だ。銃撃戦のプロで経験豊富な宮本の意見には力がある。

その後、高峰たちは三〇分程ダメ出しを食らうことになった。

「まあ、こんなもんでしょ。それじゃあ、次のメニュー行ってみようじゃん」

黄泉川が立ち上がったのを合図にそれに参加しない美琴以外が一斉に顔をしかめた。

次のメニューは黄泉川センサーの『体感！格闘技講座』である。

第二話 特警隊（シティセーバー）（後書き）

次回は上条たちが登場します！
お楽しみに！

第三話 路上（チンピラ付）（前書き）

いよいよウニ頭の登場です。

それでは、よろしくお願いします！

第三話 路上（チンピラ付）

「……なんでこうなるかなー」

学ラン姿の高峰はもう日が暮れた街を一人で歩いていた。ジャッジメ風紀委員の装備品の入ったバックを持ち、一五〇センチオーバーのカーボンロッドを背負っている。

昼間にあつた『講習』でもう投げられるわ投げられるわでもう大変だった。中途半端に合気道ができたり、受け身ができたりしたために黄泉川に気に入れられてしまった高峰である。

初春には「先生の注目が先輩に行つてよかったですー」と感謝されたが、注目された方はもう大変だ。自分から攻撃が苦手な高峰は（相手の攻撃を利用して攻撃をすることは得意だが）攻撃をする度に黄泉川から投げっぱなしジャーマンをくらっていた。

正直、ボロボロである。

（つか、こんな状態で緊急出勤命令なんて出ても使い物になるのか？）

シティーバー ジャッジメント アンチスキル 特警隊は風紀委員と警備員の選抜メンバーで作られた治安維持部隊だ。どちらかだけでは対処できない事態に対応するために作られた組織なので大きな事件が起こったら即呼び出しがかかる。いくつかチームがあるが少数のためまず総力戦になるから、こんなボロボロでも戦闘に参加もありうるのだ。

そして特警隊のメンバーは風紀委員や警備員をやめたわけではなく、元の団体に属したままであるため、日ごろの警備にもあたる。

以上の状況に加え、良くないことは良くない時におこるという法則がある。

で、起きたつばい。

反対側の歩道を高校一年ぐらいの学生が駆けていく。その横に白い服を着た女の子が並走しており、学生は女の子をかばいながら走っているらしい。五メートルぐらい後ろを不良の団体様が罵声をあげながら、走っている。

こりや、ジャッジメント風紀委員の出番か？と、制服のチーフポケットから風紀委員の腕章を取り出す。シテイセーバー特警隊のバッチもあるが使うまでもないだろう。そもそも知名度なら風紀委員のほうが上だ。ジャッジメント

腕章をつけながら見失わないように走る。

どこの誰だか知らないが助けて――

「不幸だ

ッ？」

高峰が心の中で決め台詞を言い切る前に、どこの誰か判明した。

（知り合いかよ……）

高峰は呆れつつ、スピードを上げた。

第三話 路上（チンピラ付）（後書き）

本当に登場しただけで終わってしまいました。次は活躍する！……
はずです。ハイ。

第四話 路地 (逃げ道なし) (前書き)

上条が活躍したことになるのかどうかどこまでも不安ですが……。
楽しんでいただけると幸いです。
それでは、よろしくお願いします。

第四話 路地（逃げ道なし）

上条当麻は走っていた

それはもう走っていた。後ろから凶悪なツラのヤクザ五名様が強烈ラブコールをしてくるが気にしている暇はない。

「……と、うま。私、足の限界かも」

横では銀髪碧眼のシスターが走っている。十三、四歳の少女シスターの名前はインデックス。純白の修道服はこの化学万歳の学園都市では恐ろしいほど目立つ。遠くからも可視性抜群で後ろの奴らを振りきれない原因になっているに違いない。

元はと言えば、インデックスが悪いのだ。たまたま手に入れたスナックを後先考えずに食い切った挙句、夜の分までまとめて炊いたご飯を何度も注意していたにも関わらず食い切り、仕方がなく入ったファミレスでなぜかヤクザにからまれた。上条はどこかの神様の^{だれか}悪意を感じる。

そんなことを言っても現状はどうにもならないわけで。

「ちつ……背中に乗れ、インデックス。おぶったほうが速い！」

インデックスは運動神経が自慢の運動部系少女でなければ、格闘が得意というわけではない。若干知識量があるだけの少女に明らか高校生以上の不良野郎から逃げられるわけがないのだ。

上条は後ろを振り返り十分な距離があることを確認してから、屈みこんだ。インデックスは躊躇なく背中に乗ってきた。彼女が小柄であったことに心の中で感謝しつつ再び走り出す。もっと彼女が重かったら早々に追いつかれてアウトだ。

大通りと路地を交互に走り相手をまこうとするが、なかなかにつこい。一〇分以内に離さなければやばそうだ。じりじりと距離を離しながら右へ左へ角を折れる。

しかし、こんな時でも、不幸の擬人化、ジェントル上条は健在だった。

「うえっ？行き止まり？」

入った路地がビルの壁でふさがれている。一応扉が付いてはいるが、電子キーでロックされている。慌てて引き返そうとするも、振り返ると路地にチンピラが入ってきたところだった。

「やっと止まったか。逃げ足王」

リーダー格らしいデブスキンヘッドに茶髪グラサン、鼻ピアスにチビロン毛にジャラジャラアクセ男。どれも一対一なら勝^{サシ}ち目があるだろうが、一対五では限りなくゼロだ。

しかし、やるしかない。

ここで上条は身を引くことはできない。ここで引き下がること、そして、この目の前の野郎に負けることはインデックスが傷つくことと直結する。上条はゆつくりとしやがみ、インデックスをおろす。

彼女の腕が震えていたのは気のせいだろうか？

また同じようにゆつくりと立ち上がる。この状況では上条の右手に宿る力は相手を叩きのめしてくれる訳ではなく、確実に身を守れる訳ではない。

だが右手は便利だ。

目の前のクソ野郎を殴り飛ばすことができる。そのためにはただ右手を握りしめればいい。強く、強く握りしめ一歩前に出る。

「……とうま？」

「大丈夫」

絶望的な状況だが可能性はゼロではないはずだ。それを信じ、上条はもう一歩前へ出る。

デブスキンヘッドがにやにやしながら、近づいてきた。互いの距離は二メートル。一触即発とは、まさ

にこの状況のためにあるようなものだ。表面張力で何とかこぼれずに済んでいた水に僅かに衝撃を加えるようなもので、一瞬で均衡が崩れる。

先に均衡を崩したのはデブスキンヘッドだった。無言で襲い掛かってくる拳をかわし、それをかわしてから、そいつの顔にストレートを叩き込む。顔にもでっぷりと脂肪を溜め込んでいるのか、そんなに効いていないようだ。しかし、急所を叩けばどんな男でも倒れる。膝蹴りで男の急所を狙う。相撲取りのように腹の脂肪で隠せるほどのデブでもなかったようだ。あっさりと崩れ落ちた。

これならいけるか。続けて襲いかかってきた茶髪とアクセ男を殴りつつ賢くもない頭をフル回転させる。この都市では無能力（レベル0）だが、喧嘩慣れしていることもありこういうことなら頭の回転は速い。

しかし、運命の女神はそううまく微笑んでくれなかったようだ。

アクセ男が殴り掛かってきた。避けようとしたが足に抵抗を感じ、一瞬で足元を見るとさっきまで地面でのたうちまわっていたデブスキンヘッドが足にしがみついていた。プライドも捨て、勝ちに来たらしい。

アクセ男の拳が上条の顔面にヒットした。1メートルほど吹っ飛ばされ地面に後頭部から叩きつけられる。衝撃で息が詰まり、視界に星が散る。

「とうま！」

インデックスの叫び声が悲痛だ。彼のせいでこんな声を上げさせてしまっているのだから上条にとって精神的にかなり堪える。

（ちくしょう、が……？）

上条の腹に蹴りが入る、追い打ちをかけるように一発、二発とさらに蹴りが入っていく。

「どうしたどうしたア。そんなもんか、思ったよりこしがねえなあ！ オイ」

「とうま、とうま——っ！」

インデックスが何か叫んでいるが気にしている余裕はない。立ち上がらなくては攻撃を回避できない。しかし、立つことをチンピラの攻撃が許さない。

（なにか……突破口があるはずだ。思考を止めるな……頭を回せ……ここで倒れたら……そのツケを払うのは……インデックスなんだぞ）

彼女が傷つくのだけは御免だ。

地面から立ち上がれないまま反撃を試みるも、相手が五人では勝ち目はない。

インデックスの叫び声に泣き声が混じりだした。チンピラは上条を完全にノックダウンしてから彼女に取り掛かるつもりなのか、一向に注意を払っていないようだ。

この隙に逃げてくれよ、と祈りつつ、

インデックスがこちらに駆けってくるのを目の端で捉えていても、

身動きがままならない状態ではどうしようもできずに倒れたまま
で、

思考回路が完全に途切れる寸前に、

「そこまでだ。そいつらから離れてくれないか？」

その声は届いた。

第四話 路地 (逃げ道なし) (後書き)

ここから先は超スローペース投稿になると思います。
気長に待ってやってください。

第五話 路地裏 (高峰付) (前書き)

なんだかごたごたしてきましたがお付き合いください。

第五話 路地裏（高峰付）

「ダレ？あんだ」

高峰が上条と連れの子を発見した時には袋小路の奥でチンピラ五人にボッコボコにされていた。

女の子——シスターみたいな恰好をしている——は、奥から上条を助けようとしていたのか走り寄っていくところだった。女の子に怪我はなく、着衣の乱れもないようだ。上条もまだ意識はある状態だった。

何とか間に合ったか。

高峰は腕章を引っ張りつつ、チンピラに言い放つ。

「ジャッジメント風紀委員だ。今、貴様らが行っている行為は傷害罪にあたるってことを承知の上での行動か？」

「ハン。コーコーセイジャッジメントに何ができる？ここで全員拘束しますかあ？」

強気に出た高峰を鼻ピアスがキラキラした目で睨みながら言った。

「それでもいいんだけど……」

高峰は胸ポケットに差してあるボールペンのようなものを取り出して振った。

「もう君たちの顔と行動、音声その他もろもろを記録してあるからすぐに指名手配されるんだよね。ここで頑張る必要もないんだ。だからあっさり捕まってくれると楽なんだけどなあ。」

どうやらカメラ付きのボールペンらしい。

「貴ツ……様ア？」

激昂した鼻ピアスは高峰に殴りかかってくる。顔面にヒットすればかなりの威力だろう。

しかし、相手が悪かった。相手は合気道のそこそこの使い手であり、さっきまで警備員アンチスキルの格闘講座を受けていた。

高峰はひよいとかわすと鼻ピアスの腕をとりバランスを崩す。そのまま、相手の懷に体を捻じ込み勢いを殺さず顎に肘鉄を叩き込んだ。鼻ピアスはあっさりと沈黙し、崩れ落ちた。

「コーコーセージャツジメントでもバカにできんだろ？」

涼しくそういう高峰に、チンピラたちはびびりながら懷から何かを取り出した。銀色に鈍く輝くそれは――

ナイフだ。学園都市製のもので手軽な値段とコンパクトであることが売りのフォールディングナイフ。

「つと、四対一でこのハンデはきついな」

そついうと高峰は背中に背負ったカーボンロッドに手を伸ばす。カタン、という音とともにホルダーから外れ両手に収まる。

「そんなもんだしてくるってことは、それなりのリスクがあること、わかってるよね？」

チンピラたちは手元に凶器があることと集団心理のせい、恐怖心が薄くなっているようだ。四人まとめてかかって来ないで、一人ずつ飛び込んでくる。

この状況は圧倒的に高峰に有利だ。ナイフの刃渡りは一〇センチ弱だが、カーボンロッドには一五〇センチを超えるリーチがある。ナイフが有効な距離まで飛び込む前にロッドの一撃が待っている。まとまって動かない限り勝ち目はない。

あっという間に三人倒れ、残るはチビロン毛だけになった。

チビロン毛は顔を真っ青にすると、高峰に背を向けた。逃げる先は袋小路の奥、逃げ道はない。

だがチビロン毛には策があった。

「キャッ……？」

「くっ、来るな！こいつがどうなってもいいのか？」

袋小路の奥には女の子がいた。その女の子の首筋にナイフを当て、高峰と睨み合う。

「うん。なかなかいい手だよ。そうなっちゃロッドを振るうこともできないし、能力を使おうとしてもそのこを巻き込んだじゃう」

でもね、と高峰は続ける。

「それが自殺行為だって、気が付いてる？」

は？とチビロン毛が呆けた声を出したが言葉の意味をすぐに理解することになる。

「お前よオ」

ゆらりと立ち上がった上条が睨む。街灯の灯りのせいで顔が黒く塗り潰されているが目だけがギラギラと輝いている。チビロン毛がヒツと声を上げるがもう遅い。

「インデックスに……」

上条は前に一歩出る。上半身が脱力しているものの上条の迫力にチビロン毛は目をそらすことができない。上条の右手が強く強く握られる。

チビロン毛は何か叫んでナイフを上条に向けてきたが上条にとってそんなことどうでもいい。インデックスからナイフの切っ先がそれたことがわかればそれでいい。

「手エだしてんじゃねエツ？」

ドカン！と凄まじい音がしてチビロン毛が後ろに吹っ飛んで気絶した。インデックスは焦ったチビロン毛が手を放していたためその場に取り残されていた。

高峰はため息をつく、街の灯りに黒く潰された空を見る。あとは警備員アンチスキルを呼んで終わりだ。

めんどくさいとか何とか言っ、この快感があるから治安維持はやめられない。

第六話 落日（その日の終わり）

高峰はさっさと警備員^{アンチスキル}に連絡を入れると上条のほうを振り返った。ちようどシスターみたいな恰好をした女の子が上条の頭に噛みついていているところだった。

「ちよつ、インデックスサン？なんで私めが噛みつかれ痛ア？ワタクシ上条はあなたを守るために痛い痛い？スイマセンゴメンナサイわかったから放せインデックス――

――？」

「なにがわかつたの？五人相手にケンカ挑むなんて正気じゃないよね！だいたいとうまはその考えなしに突っ込む性格をなんとかしないといけないかも？ああいうときは下手に出て逃げるんだよ」

インデックスと呼ばれた少女はどうやってたらそんなことができるのか噛みついたまま話している。

「アンタはけが人に対する配慮とか心配とかないのか？」「心配したから怒ってるんだよ？」

「そうじゃねエ！ケガ人に傷増やしてんじゃねえよ！」

ギアアギアと元気そうだが高峰は上条の傷が心配になってきた。クライマーズハイにでもなっているのか？

「……ねえお嬢ちゃん。君のいうことはもっともなんだけど噛みつ

くのは後にしてもらっていいかい？先に上条の手当てをしてしまいたいんだけど」

あつ、と慌てて離れるインデックスと、ほつ、と一息つく上条当麻。

高峰はさつさとバックからファーストエイドキット応急処置装備を取り出す。消毒液、包帯はもちろん、簡易血液検査器まで入った専用装備だ。

テキパキと傷を診ていく高峰は思ったより傷が浅いことに気づく。あんだけ蹴られていたのに骨折なし、出血も少ない。しかし、骨にひびが入っている可能性があるから精密検査は必要だろう。

「思ったより大丈夫そうだね。けど、一応病院行つところ。いい医者を知ってるんだ」

「ああ、サンキュウな、高峰」

高峰が上条を立たせたタイミングでアンチスキル警備員が飛んできた。チンピラたちをさつさと車に突っ込んでもらい、歩いて近くの病院にむかう。

「まったくとうまは、いっつもいっつも無理をして」

インデックスは噛みつきで怒りを発散しきれていないからかご立

腹だ。

「だな」

「……おい高峰。なぜそこでそのリアクションが来る？」

「白井黒子から聞いたぞ！。9月1日の地下街襲撃事件で一人で能力者に突っ込んだとか、レムナント残骸事件で座標移動のハイブポイント十一次元絶対軸への三次元ベクトルによる直線的、強制的介入をしたとか」

「お前、白井と知り合いなのか？」

「知り合いというより同僚。シテイセーバー特警隊のね」

そんなことを話しているうちに病院についた。

「病院って、ここ？」

「そうだけど、知らなかった？」

「知らなかったもなにも……」

いつもの病院である。

結局上条はカエル顔の医者と切っても切れない関係にあるらしい。

「もつと安全な行動を心掛けるんだね？」

カエル顔の医者 of 診察室からそう言われ追い出されると、廊下ではインデックスと高峰が待っていた、その隣ではなぜか、インデックスより小柄な担任月詠小萌とその対極にいるような美人体育教師黄泉川愛穂が待っていた。

「あ、上条ちゃん、傷は大丈夫なのですかーっ？」

「うわっ、小萌先生、静かに！ここ病院！」

「あ、そうでした。ゴメンナサイです」

「小萌先生はなんでここに？」

「クラスの子がトラブルに巻き込まれたら、担任の先生は呼び出されるのですよー？」

まあ上条ちゃんが元気そうでしたのでよかったです、小萌先生はそう言う
と、ため息をついた。

「感動の再会はこのぐらいにして、ついてきてくれるかい？」

そういったのは黄泉川先生だ。インデックスが軽くおびえたように「どこへ？」と訊いた。

「一応犯人たちは捕まったからね。現行犯逮捕だけで一応被害者にも証言を取っておく規則になってんじゃない。だから事情聴取」

今回は犯人側に強姦未遂の疑いもかかっているため被害者は匿名でもOKとのことだったので、上条は安堵する。インデックスはゲスト登録されているものの、この都市の市民ではない。しかも0930事件から『魔術サイド』に警戒を強めているこのご時世、インデックスの正体がバレるとかなり危険だ。

病院のホールで10分ほど事情聴取を受けると上条とインデックスはあっさりと解放された。

「で、高峰。なんでお前は俺たちについてくるんだ？」

不機嫌そうにそういうのは上条だ。街灯に照らされた夜の歩道で150センチオーバーのカーボンロッドを持った男がすぐ近くにいるのだからまともな感想といえるだろう。

しかし、上条にはもう一つ理由がある。

上条とインデックスが向かっているのは上条の『男子寮』。

男子寮に女の子であるインデックスが住み込んでいて良いわけもなく。

そして、この都市の風紀を守る高峰颯太にこれを見つかるとうなるのか。

はつきり言って、ヤバい。

「なんでって、俺はまっすぐに家に向かっただけなんだけどな」

そうなの？と上条。前を見ると、もう件の男子寮が見えてきた。

「そこまでして俺らを見守ってなくてもいいぞ？すぐそこだし」

「大丈夫。もう俺んちも見えてるから」

は？と上条は一瞬頭が真っ白になった。

このあたりは学生寮しかない。

学生寮は学校ごとに分かれている。

高峰は上条と同じ高校だ。

そして、このあたりに上条の高校の男子寮は一つしかない。

これ即ち

高峰が向かっていた建物は上条が向かっていた建物、である。

「あ、そうだったそうだった。ちょっと明日の朝のパン買ってこないといけないんだった」

上条がそういつてなんとかタイミングをずらそうとしたが、イン

デックスは学生寮に一步踏み込んで

「え？帰らないの？」

そういつてしまった。

目を見開く高峰。無邪気に首をかしげるインデックス。頭を抱える上条。

三者三様に固まったあと一番最初に動き出したのは上条だった。

「……ちつ、違っんだ！これには深い訳が」

言い訳しようとする、いきなり高峰が大笑いしだした。

「つまり、お前たちは一つ屋根の下暮らしているわけだ！」

「頼む！高峰？このことは内緒にしていってくれ！」

腹を抱えたまま大笑いし続ける高峰に手を合わせる上条。

「わかったよ、誰にも言わん。墓場まで持っていくことにしよう」

相変わらず笑いながらエレベーターを呼び乗り込み高峰。上条たちも乗り込むと高峰は3のボタンを押した。

「俺の部屋は301号室だ。なんか困ったらおいで」

三階につき高峰が下りる。扉が閉まるその寸前に

「がんばれよ、秘密の同棲生活」

デメエと上条が飛びかかる前にドアが閉まった。

第六話 落日（その日の終わり）（後書き）

これで第一章の一区切りですこれからもお付き合いください

行間1（前書き）

原作にならってこんなものも作ってみました。

行間 1

土御門は夜の通りを歩きながら携帯電話を取り出した。

青いサングラスを学ランの胸ポケットに差し、学園都市外周のゲートを前に見ながらアドレス帳を操作する。

登録カテゴリは『仕事仲間』。そこには名前は表示されていない。ナンバーだけがズラズラと並んでいる。その一つに合わせると発信ボタンを押す。

『……土御門か』

相手にはそう待たずに繋がった。

「今から荒仕事だ。すこし出てくるぜい」

『仕事だと?』

「あっち側の人間が動いているらしい。なんだかここを狙っているらしいぜい」

『で、そいつらを駆逐してこい、ってわけか? お前が出なきゃいけない仕事なのか、そもそもそれは? 肉体的にハンデを負ってるお前を出すより応援出したほうが損害はすくないだろう』

相手の反応はいかにも彼らしい、と土御門は思う。仲間思いで慕われている彼らしい心配だ。

苦笑いしながら彼に返す。

「しょうがないにゃー。なんせ最大主教アークビショップ自らのご指名だ。断るわけにはいかないぜい」

『———そうか、気をつけるよ』

まったくこんな時に禁書目録の周りから土御門を離すとは、と彼が呟くのが聞こえた。ローマ正教の攻撃を受けた学園都市に禁書目録はある。ただでさえ応援を送ることが難しい所で、主なパイプを握っている土御門を学園都市から離すとは最大主教アークビショップもおかしなことを考える。

「そういう時のためにお前がいるんだろー？」

『あのな、メインで動いているのはお前なんだ。それをいきなりこっちに押し付けられても』

「頼んだぜい」

言っている内容に対して口調はどこまでも軽い。だがそこには土御門の意思が通っていた。

——こちら側は気にするな。

「本当に頼んだぜい。禁書目録とカミヤンを」

彼に心配をかけまいとしていることを彼は知っていた。

土御門がそこまでして戦っている理由も知っていた。

ならば彼は心配をかけさせるわけにはいかなかった。

『わかってる。守って見せるさ』

彼はそこで一区切り置き。

『お前も気をつけて行って来い。義妹を泣かせるなよ』

それを最後に電話を切った。

魔術師、土御門元春は携帯をポケットに仕舞い、ゲートに向かう。

この学園都市を、正確にはこの都市にいる義妹を守るため、ゲートを潜る。

その先には殺伐とした戦いが待っているはずだ。

それでも、土御門はゲートを潜る。

彼も守ってみせると言った。それに応える義務がある。

ゲートの先には暗い闇が広がっていた。

行間1（後書き）

次回からは第二章です。お楽しみに

第七話 緊急招集（ホットスクランブル）（前書き）

第二章スタートです

といっても具体的に動くのは次回からです
それではどうぞ

第七話 緊急招集（ホットスクランブル）

「うー、腹減ったー」

日曜日の昼過ぎだというのに制服を着て街を出歩いていた高峰が学生寮に帰ってきた。

そもそもこの午前中の行動はイレギュラーだった。

今日の午前中は楽器屋に行つて新しいギターの弦を買つて張りなおして音楽に浸るはずだったのだ。それが白井黒子に呼び出されたと思つたら、会つたことのない常盤台の生徒と一緒にいて『わたくしと勝負してくださる?』ときたもんだ。

理由は婚后光子と名乗つた生徒曰く「わたくしより強い空力使い（エアロハンド）がいるなんて許せないの」ということらしい。

高峰も婚后も同じ大能力者（レベル4）だが、書庫では「この都市の気体操作系のトップは高峰颯太」となっているらしく、婚后にとってそれが許せなかったようだ。

そのせいで第二学区に申請をだし、戦闘シュミレーターの使用許可をとつて、対戦した。

婚后は物体に風の噴射点を作りミサイルのようにブッ飛ばすトンデモ発射場ガールである。

つまり、婚后に物体を触らせなければ、ただの少女である。

高峰はエアロウオール気圧制御で強風を作り、婚后の体をブッ飛ばし地面に叩き付けて、戦闘は十七秒で終了した。

そんなことをしてきた高峰は学生寮に帰ってきている。お昼をファミレスで食べても良かったのだが、あいにく冷蔵庫の中のブロッコリーを食っておかなくてはならない。

午後は今度こそ楽器屋に行く、と決めて三階まで上る。

そして、そこに見覚えのある女の子がいた。

「あ、そうただ」

「えーと、インデックスちゃんだっけ？」

一週間ぐらい前に知り合った女の子はにっこりと笑ってうなずいた。

「どうしたんだ？」

「とうまがお昼ご飯作り忘れてどこかに出かけちゃったんだよ。冷蔵庫もからっぽだし」

「ハハハ、それでお昼と一緒に食べさせて、って所かい？」

そういいながら高峰はドアのカギを開けてインデックスを部屋にあげる。昨日部屋を片付けていたので見られてまずいものが出ているなんて心配はしなくていい。

お邪魔します。といって純白シスターが部屋に入る。

「なんだかとうまの部屋と印象違うかも」

「そうだろうね、ギターとかが出てたりCDがこんなにあつたりはしないだろうね」

高峰はそんなことを言いながらロッドを置いた。学ランを脱ぎ部屋の隅のほうに投げるとエプロンをとる。

「ちょっと待っててね。すぐ作るから」

高峰は二人分のお昼ご飯を作り始める。

インデックスがそれだけでは満足せず、高峰のうちの冷蔵庫をほとんど空にしたのは言うまでもない。

「ねえ、そうたから見てとうまってどんな人？」

たまたま買っていたビスケットを一箱丸々空にしたインデックスはどことなく不安そうに高峰に聞いてきた。

「うーん、……俺は学校での上条しか知らないし、いろいろ活躍してるのは話でしか聞いてないんだけど」

高峰はそう前置きをして話し始める。

「友達思いのいい奴って印象しかないな。相手が無能力者（レベル0）だろうと超能力者（レベル5）だろうと分け隔てなく接して友達が多いって感じかな。でも危機が迫っているときに、一人で突っ込んだ、とか話を聞くと無茶かなーとか思っけどね」

そっか、と言って少し考え込むインデックス。何でこんなことを聞くんだろっ？と考えていた高峰はピンときた。

「上条の周りには女の子が多いからなー心配か？」

そういうと、インデックスは肩をビクウツとあげて顔を真っ赤にした。図星か？

「な、なななななんてことを言うんだよ？私は敬虔なる修道女であってそんな誤解を招くようなコメントをされても困るかも？」

「御坂美琴は強敵だぞ？明らか上条に好意持つてるからなー。クラスメイトだと姫神秋沙あたりが有力か？」

なっ、と驚いた表情をするインデックスはくちのなかで『おのれ、あの短髪』と呟きプルプル震えているのが怖い。どうやら図星だったらしいが、この後、上条と彼女たちの関係がこじれないことを願うばかりである。

「でも、大丈夫だろうよ」

高峰は軽い調子でそういつとインデックスは『え?』と顔を上げた。

「だって、そっちに流れるような男だったら、インデックスちゃんを追い出してるでしょ。それに、少なくとも上条はインデックスちゃんが好きなんじゃないかなーなんて俺は思ってたんだけどね」

またまたインデックスの顔が赤くなる。

「そうじゃなかったら不良5人相手にケンカを受けて立ったりしないって。本人は認めないだろうけどね」

そっか、そうなのかな、と呟くインデックスを高峰は優しい目で見ていた。

そんな優しい時間が流れていたのだが、一瞬で終わりを告げる。

テーブルの上に置いてあった高峰のケータイが大きな音で鳴り出したのだ。

高峰はこめかみを軽くたたくと通話を始めた。よく見ると耳の前に小さな機械がついている、ハンズフリー用のインカムなんだが、

機械オンチのインデックスにはわからない。

「はいもしもしこちら高峰、……ああ、先生、………はい、……はい……場所は？」

高峰の顔が真剣なものになっていくワイシャツの胸ポケットからメモ帳を取り出し殴り書きでメモを取っていく。

「ポイント726548・W・了解しました。すぐ向かいます」

高峰は立ち上がると学ランを羽織った。

「どうしたの？」

「シテイセーバー特警隊のお仕事。急ぐからこの部屋から出るとき鍵をかけておいてくれ」

高峰はインデックスの方にキーホルダー付のカギを投げるとロッドを持って飛び出していく。

残されたインデックスはぽかんとしたまま見送った。

第八話 突入準備 (プリパレーション) (前書き)

遅くなりなしたが更新です。

追記：銃器の名前が間違っていたので訂正します。

第八話 突入準備（プリパレーション）

学生寮から150センチオーバーの棒を背負った男が駆け出してきた。その男、高峰颯太は駐輪スペースへ走る。急いで自転車の力を外すと跨り急発進した。速度を出すため車道にでる。

左耳につけた骨伝導インカムから『事件』の続報が流れてくる。

——犯人グループは身代金1億5千万と逃走用のへりを要求している模様。

——こちら警備員第三班、アンチスキル南側『深緑通り』の封鎖完了。

——ジャッジメント風紀委員宮川です。竹下ビルの避難誘導完了しました。

次々とい入ってくる情報は先に現場に急行した治安部隊からのものだ。

高峰もこれまでの情報を整理しながら、自転車を飛ばす。

武装した男数名が児童相談所に押し入り、児童31人と相談員5人を人質に立てこもっている。全員が銃で武装しており要求を蹴ったり、警備員を突入させたりしたら、人質を射殺すると脅してきている。制限時間は2時間後の3時ジャスト。それまでに振り込みが開始されない場合、一〇分遅れるごとに一人ずつ殺す。

（物騒なことを考えるもんだ）

高峰は交差点を左に折れる、ロードバイクを改造した自転車は時速三五キロを超えて、ただ走る。

今度は交差点を右に曲がると、アンチスキル警備員の封鎖線が見えてきた。自転車を寄せ、身分証明証を取り出しながら告げる

「シテイセーバー特警隊第七学区一班、高峰颯太です」

連絡は回っていたらしく、すぐ通してくれた。自転車のまま乗り入れ展開用のトラックに向かう。

犯人グループから死角になっているところに目的のトラックが止まっていた。装甲車ばりのトラックに高峰は転がり込む。

「遅れました！」

「大丈夫じゃんよー」

トラックの中には黄泉川をはじめ、白井、初春、澤田たちが集まっていた。あと来ていないのは佐川だけだ。

「状況はどうなってますか？」

高峰が尋ねると、答えはパソコンのキーを高速で叩いている初春から返ってきた。何やら三つも四つもブラウザを入れ替えながら同時に処理しているらしい。

「監視カメラが片っ端から壊されてたんで『カメラフライ見張蠅』を出して状況を探ってます。今のところ犯人は11人、ホールで人質の監視をしているのが6人、付近の監視をしているのが5人です。全員銃を持ってますね。タイプはPKI35、最近スキルアウトで取引が盛んなタイプです」

PKI35は高峰も知っていた、装弾数8プラス1、破壊力よりも貫通力を意識したセミオートマティックだったはずだ。

「3人が能力者ですね、異能力者（レベル2）のエアロハンド空力使い一人に低能力者（レベル1）のテレパス念話能力に……この人がリーダーですかね、うっぎけいたるう宇次圭太郎強能力者（レベル3）のサウンドシフター音波変換です」

「サウンドシフター？」

高峰の疑問には黄泉川が答えた。
「音を変換して超音波を作り出す能力じゃん。強能力者（レベル3）ともなると、窓ガラスぐらいなら割

れるんじゃないか」

確かにやつかいだと高峰は思う。スキルアウトレベルなら銃器の訓練を積んでいない限り短時間で片付けることができる。しかし能力者となると話は別だ。ノーモーションで攻撃されたり、ありえない身体能力を発揮して逃げられたりと対応が難しい。

「ほかに武装はありますか？」

そう聞いたのは警備員出身の宮本だ。銃器の扱いでは学園都市1、^{アンチスキル}2を争う腕前らしい。

「銃身をカットオフしたショットガンが二挺。あとスタングレネードらしきものが確認されていますが……」

それなら問題ないだろう、と結論付ける宮本。どう問題ないのか高峰にはまったく理解できなかった。

「あと問題がもう一つ……」

初春がパソコンの画面を皆に見せながら言った。

「外の人間がいるようなんです」

「外？」

黄泉川中心にメンバー全員がパソコンを覗き込む。

「佐々木和久、3日前に入ってきたようです」

外部の人間ねえ、と呟くのは黄泉川だ。

黄泉川の疑問に皆が頭をひねる。

外部の人間が入ってきて、やる犯罪ことといえば、産業スパイか能力者のDNAマップを盗み出すのがほとんどだ。児童相談所に押し入って立てこもり事件なんて学園都市で行うにはリスクが高すぎるだろう。

うーん、と悩みこんでいたそのとき――

「遅れてスイマセン！」

そういつてトラックに飛び込んできたのは佐川だ。息を切らせている。

「遅いけどまあいいじゃんよー。全員そろったから突入前会議始めるじゃん」
フリーフィンゲ

三十分後、白井黒子の空間移動能力で建物の影にたどり着いた高峰、島田、白井の三名は突入の合図を待っていた。
テレポート

「それにしても、この防弾ポリマーって面倒くさいですね」

そんなことを言っているのは白井だ。

「それなら、長ズボンにしたらいいじゃないか。治安維持でいまから人質救出のため突入ですってときに制服のスカートってどうなんだ？」

高峰は素朴な疑問を口にするが常盤台のお嬢サマには受け入れてもらえなかったらしい。

一応、相手は銃を持っているのでふつつは制服でそのままGOなんてことはしない。

ただし、学園都市では違う。

高峰も制服だが、学園都市の特殊素材製のものだ。衝撃までは緩和してくれないものの、ナイフや銃で風穴があくことを防いでくれる。針も通らない無敵のファンブリックなんて謳い文句だが、どうやって縫っているのかナゾな一品だ。

先ほどの防弾ポリマーは素肌に塗りたくり同じ効果を得る、シテイセ特警隊イバよつの装備だ。いくらなんでも、女の子がスカートで危険地域突入はいただけないと用意したものらしいのだが、さつさと防弾性のいいズボンを支給したほうが早いと思うのだが受け入れてもらえないようだ。

「まあまあ、サービスなんじゃないの？」

そんな身もふたもないことを言うのは島田だ。島田は手元の銃の調整をしながら気楽に言う。

SM200J。中高生でも扱えるように小型化と低反動化したサブマシンガン。銃身の真上にへばり付くようにマガジンが伸びているその様は昔どこかの軍隊が採用していたFn-P90に似ている。

『もうすぐ、突入だ。気を引き締めていくじゃん！』

黄泉川の無線を確認した3人ははっとしたように顔を上げる。高峰は時計を確認すると2:29を指していた。あと1分ない。

『最終確認。狙撃班!』

『レッツゴー』

『前方援護班!』

『レッツゴー』

『情報処理班!』

『レッツゴー』

『救護班!』

『レッツゴー』

次々と仲間からの応答が返ってくる。主に動くのは特警隊だが、アンチスキルジャッジメント警備員や風紀委員も援護に回ってくれている。

『突入班!』

高峰は無線機を取りビルを見上げる。覚悟は決まった。

「レッツゴー」

白井が高峰と島田の肩に手をかける。空間移動の準備だ。

『それじゃあ、いくよ、————プリパレーション、カウントスリー』

黄泉川の声が無線越しに聞こえる。島田は銃器を握り直し、

『カウントツー』

白井は自分の演算が正しいことを確かめ、

『カウントワン』

高峰は自分の手にある力を使い、皆を助け出すと決心し、

『——カウントゼロ?』

その時がきた。

午後2時30分、シテイセーバー特警隊を中心にした治安部隊が突入を開始した。

第九話 作戦決行（カウント0）

2：29：35PM

中沢は眉をひそめて外を見た。

向かいのビルは風紀委員^{ジャッジメント}が避難誘導をして、無人のはずだった。
それなのに向かいのビルの3Fで何かが動いた気がしたのだ。

——まさか、警備員^{アンチスキル}か？

中沢は慌てて柱の陰に隠れる。いくら教師が相手とはいえ、彼らは戦闘訓練を積んでいる。遠距離射撃をされては、スキルアウトの中沢に勝ち目はない。

ホルスターに突っ込んでおいたPKI35を抜く。チェンバーをスライドし、初弾を装填する。

実戦で使うのは初めてだ。脈拍がおかしいくらい上がっていき、息まで上がる。

突入するようなら人質を殺すと警告していたのに、なぜこんな行動をとるんだ？

考えられる可能性はただ一つ。

要求を蹴ったとしか考えられない。

（やっぱり児童相談所とかじゃなくてもっとちゃんとした小学校とかを襲つとくべきだったんだ）

能力者が多いところは制圧しにくいからと避けてこの児童相談書を襲ったのだ。

しかし、裏を返せば、学園都市にとって利用価値が少ない人間ばかりを人質に取っているということだ。裏切られる可能性は比較的高いといえるだろう。

（ちつくしょうがつ……！）

中沢は無線機を取る。

「中沢だ？向かいのビルに警備員が来てる？奴らは要求を――」

中沢の言葉はそこで止まる。理由は単純。

窓ガラスを割って何かが投げ込まれた。筒状のものが床に落ちる。スプレー缶にも見えるそれが中沢の足元で止まる。

（なっ……？スタングレネード？）

そう認識した瞬間、それを証明するかのようにそれが爆発し、中沢の意識を食いつぶした。

2：29：53 PM

『中沢だ？向かいのビルに警備員アンチスキルが来てる？奴らは要求を――

――』

宇次圭太郎うつぎけいたろうが無線機を取ると同時に無線機がそうがなり立てた。

直後、

無線機が殺人的なノイズを発した。宇次は慌てて無線機から耳を離す。

学園都市が要求を蹴った。

それだけが頭の中をかけていった。

「おい、外を確認しろ。もう突入してくるかもしれねえ！」

窓際のいた仲間には指示を飛ばし、カーテンを開けるよう指示を出す。宇次はパソコンに目を向ける。表示されているのは、この建物のセキュリティだ。監視カメラの映像を確認していく。

今いるのは2階。2階の監視カメラは万が一ハッキングされた時のため潰しておいた。今確認していくべきは1階の様子だ。同時にすべての階のセンサーを起動する。何か動いたら知らせてくれるはずだ。

そうしようとした時だった。

画面が一気に飛んだ。セキュリティシステムの操作画面がいきなり消えたのだ。大量の警告文が一気に流れ込む。

（なんなんだよ、おい？こんなのどうやってらできるんだ？）

宇次の頭がパニックになりかけたとき。

ビル全体の電源が落ちた。

2 : 3 0 : 0 0 P M

「電源落としました。突入してください」

初春飾理はパソコンをたたきながら無線で突入隊に連絡を送る。

児童相談所のセキュリティシステムのクラッキングなんて初春にとって朝飯前だった。強制的に相手をシステムから引き離し、大量の警告文を送り込む。ついでにシステムの主導権を握っておく。これくらい簡単な作業だ。

学園都市のビルは全体の電源を切ってもセキュリティシステム自体が切れることがないようにできていた。電源が落ちてその隙に悪

さを働くのは常套手段らしいが、学園都市では通用しない。

（さて、と。バックアップでも始めましょうか）

初春の手が恐ろしいほどの勢いでキーボードを叩いていく。

2 : 3 0 : 0 3 P M

何やら二階の廊下で、破壊的な音が響いた。

「おいおいおいおい、アンチスキル警備員の御登場か？」

急いで下北は階段を下り、2階に向かう。踊り場を急角度で曲がったとき電気が消えた。

（こりや間違いないな。さてと、ブチコロシ確定。ヒヒツ、たーのしーねえ！）

下北の手にはショットガン。銃身を切り詰めたもので、精度は低

いが、まあ気にすることはない。仲間にあたったって、その時はその時だ。

下北は階段から飛び出すと、爆発があつたらしい方向へ走る。スプリンクラーが作動しているから間違いない。

窓ガラスに面した廊下に飛び出して、景気よくショットガンをつ放そうとしたその時。

いきなり何かに躓いたように派手にこけた。手から銃がすっぽ抜け廊下を滑る。下北は銃を追うようにその方向に向かおうとする。立ち上がらなければ警備員アンチスキルが来る！

しかし、うまくいくことはなかった。

足が動かない。何が起ったのか足が地面から離れない。まるで、そこだけ重力が強くなつたかのように。

目の前に落ちている銃さえ拾うことができれば、そう思って手を伸ばすも１メートルほど届かない。

（畜生が！能力者投入してきやがったな？）

そう心の中で叫んだ下北の目の前で、下北の唯一の切り札のショットガンが真つ二つになった。

（ん な っ ……？）

刃物が横切ったわけではない。銃のようなもので切り裂かれたわけでもない。なのにショットガンが真つ二つ。下北は目を見開きながら前を見る。

（ウォーターカッターか！）

スプリンクラーで全身びしょ濡れの^{アンチスキル}警備員が現れた。一緒にいるのは制服姿の男女。^{ジャッジメント}風紀委員だろうか。

「アンタら、誰だ……？」

「^{シティーセーバー}特警隊つていってもわからんか。初めての出勤になるからしかたないじゃん？」

^{アンチスキル}警備員の女がそう言う。あっさりと手錠をかけて、後ろの^{ジャッジメント}風紀委員に声をかける。

「澤田、もういいぞ」

その直後足にかかっていた力が抜けた。

「さて、次行こうじゃん」

そういつて下北を置いて警備員^{アンチスキル}たちは奥へと向かう。

2 : 3 0 : 0 3 P M

高峰、島田、白井の3人は敵陣の真つただ中に着地した。

真つ暗な部屋^{カメラフライ}だった。見張蠅で中の様子を確認していたとはいえ、人質の上に空間移動^{テレポート}しないか心配だったのだが、白井は確実に仕事をこなしたらしい。

犯人の配置は窓際に2人、2つある出入り口に一人ずつ、人質の

監視に2人の計6人。

高峰は背負っていたカーボンロッドを取ると窓際の二人に向かって振るう。明らかに届くわけがない距離にいる敵だが、高峰にとってこの距離は問題ない。

そもそも、カーボンロッドは相手を打つためだけに持っているわけではない。

高峰の能力は気圧制御。^{エアロウオール}広い範囲の気圧を操るなら問題はないのだが、室内などピンポイント攻撃を仕掛けなければならない場合、「イメージを正確に固める」必要がある。そのためのカーボンロッドだ。それでエリアを指定し気圧を操作する。

空気を切り裂くカーボンロッド。その空気が増強されて窓際の犯人を窓ガラスごと吹き飛ばす。^{テレキネシス}外では念動力車が待っているため吹っ飛ばしたところで問題ない。

同時に白井が金属矢を使って正確に銃だけを打ち抜き、戦闘不能にしていく。

島田はSM200Jを振り回し相手をけん制しつつ（撃たなくても銃があるというだけで効果がある）能力で正確にかたをつけていく。

三人で五秒後には銃をすべて沈黙させ、2人吹き飛ばし、1人ねじ伏せた。

しかし宇次圭太郎も黙ってはいない。人質を盾に取りつつ能力を使い自分の声を超音波に変換し、高峰に叩き付ける。窓ガラスぐらいなら割れるし、狭い範囲なら相手を『焼く』ことだって可能な能力だ。

「残念。気圧操作が得意な奴に超音波はきかないよ？」

攻撃の初動に気づき、高峰は一気にロッドを横一線に振るう。そのエリアの気圧を極端に下げ真空に限りなく近くする。可聴音域を超えているとはいえ所詮空気の振動である。空気がなければ伝わらない。

歯噛みする宇次の後ろでヒュンという音がした直後、宇次は後頭部に衝撃を感じ、前に倒れこむ。

敵である空間移動能力者に能力を使ってとび蹴りされた気が付く前に、意識が途切れた。

リーダーが倒れたことで、犯人グループは一気に崩れていく。

2 : 33 : 07 PM

シテイセーバー
特警隊が活躍した突入作戦は200秒からず終了した。

第九話 作戦決行 (カウント0) (後書き)

誤字脱字があれば教えてください。感想もお待ちしております。

第一〇話 撤収（アフターミッション）（前書き）

遅くなりましたが更新です。

第二章の一区切りです。

第三章でいよいよ魔術登場です、……たぶん。

第一〇話 撤収（アフターミッション）

「思ったよりあっさりかた付きましたね」

銃を肩に担いで人質が監禁されていたホールに入ってきた佐川光輝がそういった。助太刀に来る予定だったらしいが、その前にさつさと高峰、白井、島田の三人が武装解除してしまった。

「まあ、よくやったじゃんよー。君たちはもう離れていいよ」

黄泉川は拘束されている犯人たちを見張りながら、年少の隊員達に声をかける。

「まだ帰らないように。今日はアイスおごってやるじゃん」

よっしゃあ、とガッツポーズをする高峰。こう見えても無類の甘いもの好きなのだ。

アンチスキル
警備員に犯人たちをまかせて現場を去ろうとする。

その時だった。

出口のところまで行ったとき、高峰が弾かれるように振り返った。

「たっ高峰？どうした？」

後ろを歩いていた島田が驚いたようにそう言う。

そういう島田の声が聞こえなかったかのように高峰は一点を見つめる。

視線の先には犯人たちがまとめられていた。

「高峰君、どうしたんですの？」

白井までも声をかける。意識が戻ってきたのか高峰が慌てたように「何でもない」と答えた。

（あの感覚、——まさか、な）

後ろを気にしつつ、高峰は部屋から出る。

脳裏に浮かんでくるのは、2年ほど前のイメージ。この街に来る前のある事件だ。

階段を下りつつチーフポケットに手を伸ばす。そこには安物のコンパクトナイフが収まっていた。学園都市の外で作られたナイフは

この都市では珍しい。

それをなでるように触り、一度刃を出してすぐに戻す。こうやって精神を落ち着かせるのが何かあった時の癖だった。

一度上がった心拍数が下がっていく。

（落ち着かなきゃな。演算が狂う）

ナイフをチーフポケットに戻し建物の外に出た高峰はビルを見上げる。

（警戒するに越したことをない、かな）

踵を返しビルから離れていった。

「みんなお疲れ。約束通りおこつてやるじゃん」

「やー」

そんなことを言いながら、高峰たちは街を歩く。「いい店を知ってる」と黄泉川は言つて、先を歩く。

「高峰先輩はかなり強引ですね」

そんなことを言っているのは初春だ。

「ええと、どんなところが？」

「だって、窓ガラスごと犯人吹き飛ばすなんてふつうしませんよ。『強能力（レベル3）以上の念動力者^{テレキネシスト}を待機させといてくれ』としか言わないから何が起こるかわからなかったじゃないですか。いきなりあれじゃ驚きますって」

「さつさと戦線離脱してもらうにはあれが一番だと思っただがなあ。気圧^{こんとん}下げても意識を渾沌させるのに時間かかるし、人質もまきこまれるし」

「でももうちょっと加減するじゃん」

話に割り込んできたのは黄泉川だ。

「威力がちょっと強すぎるじゃんよー。吹っ飛ばしたときに壁にまで余波が当たったんだろうけど、構造体までヒビが入ってて修理に5000万ほどかかるって報告があるけど？」

「……………（汗）」

始末書の山の処理と今後の活躍でチャラにしてあげる、と声をかけられても、高峰の血色はよくなならない。

初春、島田が乾いた笑みを浮かべ、白井は何をやっているんのですのやら、とため息をつく。

そんな中こそそと後ろから近づいてくる人影にまだ気が付いていない。

こんな時に初春に受難の時が迫っていた。

「うー」

ホップ。

「いー」

ステップ。

「はー」

ジャンプ。

「る―――――っ」

バツサア、という音とともにスカートがめくりあげられた。

「……ッ？」

「あははー。今日は緑のストライプか」

「ちよつ、佐天さん！この街中、男の子いっぱいの中で何たる暴拳に走るんですか？」

初春は顔を真っ赤にして慌ててスカートを佐天涙子の手から叩き落とす。

高峰はヒュウと口笛を吹き、島田は顔を赤くして目をそらし、佐川はどう反応したらいいか困っているようだった。

「ん？この面白い子は誰じゃんよ？」

「あ、先生、同じ柵川中学校のクラスメイトの……」

「佐天涙子です！」

「シテイサーバー特警隊第七学区一班班長の黄泉川愛穂、よろしく頼むじゃん」

握手を交わす佐天と黄泉川。佐天は黄泉川のナイスバディに目を奪われているようだ。

「そういえば初春、部署変わったんだっけ」

「今も仕事してきたところなんですよ」

「で、黄泉川先生のおごりでパフェな」

うれしそうにそういうのは高峰だが、その顔が曇る。

ケータイが着信音を鳴らしたからだ。

メールだったようで、ケータイを開き操作していく。

新着のメッセージはごく短かった

『O、U』

送信者に名前は入っていない。ただし見覚えがある。

内容を削除しケータイを閉じる。

「ごめん、友達から呼び出し入った。先生、また次の機会におごつてくださいね」

それでは、と言ってずっと押してきた自転車にまたがり仲間から離れていく高峰。

メッセージの内容が頭の中で繰り返す。

『O、U』

無線の信頼がまだなかった時代、船舶では旗で情報を交換した。
A～Zまでの旗にそれぞれ意味を当てはめていく。

『O』は『人が海に落ちた』。

『U』は

（貴船は危険な方向に進んでいる、か）

高峰が速度を上げた。緊張を持続したままで。

第一〇話 撤収（アフターミッション）（後書き）

誤字脱字、ありましたら教えてください。
感想もお待ちしております。

行間2（前書き）

三章までもう少しあります。その前にこんなものを

行間 2

「さてと、皆の衆用意はできたらうな？」

とある大きな建物だ、昔は豪華な劇場だったようで、きらびやかな内装が余計に寂しさを引き立てる。

『薄明座』と書かれた看板が残ったままの建物に声が響く。

声の主はここにはいない。

「はい」

答えたのは初老の男。——ここでは『ハンス』と呼ばれていた。周りにはいろいろな人々が集っている。

銃の手入れをする男、組手をする女たち。瞑想する男たち。

「目的を覚えているだろうな？」

ここにいない男の声は壁に貼り付けられたカードが震え、声を生み出している。

「禁書目録の回収と、幻想殺しの消去。学園都市によって捕えられている天使の解放、——以上でよろしいでしょうか」

「うむ、それでいいぞ、ハンス」

緩やかに流れる声だが、『薄明座』は妙な緊張感に包まれていた。

「それでは頼むぞ、ハンス。そして、わが友よ。諸君の成功を願おう」

それを最後にカードは沈黙した。

「へへへッ、いよいよ本番だな。ハンスさんよ」

通信を終えたハンスが振り向くと金髪の男がにやにやしながら近づいてきたところだった。黒いジーンズにどくろが大きくプリントされたT・シャツを着たその男はあまりにハンスとはかけ離れていた。

そうだな、とだけ答えたハンスはこの場のもう一人のリーダーの男——熊鷹と飛ばれていた——に声をかける。

「行くかね、熊鷹」

「そーだな、そっちの準備はもういいのか？」

「ああ、もう十分だな。——これ以上待っても意味がないだろう」

「ちょうどいい、中に入った仲間からも情報が入ったしな」

「見せてもらわなくてもいい。科学の知識なんぞ私が見てもわかるようなものでもなかるう」

そーかい、と言って熊鷹が立ち上がる。

「それじゃあ、腐りきった学園都市の成敗に行くとしますか」

熊鷹に続いて『薄明座』にいた仲間たちがごそごそと動き出す。

ハンスはポケットに手をやり指輪を取り出した。赤く輝くその指輪を左手の薬指にはめる。

（ここまで来たぞ、もう少ししたら、私を許してくれるかい？）

ハンスはもう暗くなった空を見上げて言った。

「行きましょう。ペリカンの翼の力を知らしめるときは来ました」

先には学園都市の煌々とした明かりがもっていた。

行間2（後書き）

次回の更新は遅れるかもしれませんが。気長に待っていてください

行間 2・5（前書き）

行間その2です。

もしかしたら佐天さん出番終了？
なんとか出せるように努力します。

行間 2・5

第七学区の一角に柵川中学第二女子寮がある。そこには53人の生徒がくらし、勉学に励んでいる。

「それにしても、美味しいケーキだったねー」

そういつて笑うのは佐天涙子。初春飾理の部屋で初春が入れてくれたお茶をすすっている。夕方今日はこのまま初春んちでお泊りだーッ?と思いついた彼女は彼女の家(といっても寮だが)に押しかけている。

お嬢様ブランドにあこがれる初春は美味しいお茶を淹れられるよう特訓中だという。特訓の成果があつたのかいまいぢわからない佐天である。

「……午後のケーキが美味しかったですけど、今のお茶の感想を教えてくださいよ」

机を挟んで目の前で膨れているのはパジャマ姿の初春だ。寝る前だからかトレードマークの花飾りは外している。

「……可もなく不可もなく、て感じ？」

適当に返事をしながら、佐天は夕方のことを思い出す。

「それよりさーあ、シテイセーバー特警隊だっけ？ けっこう、ジャッジメント風紀委員からのメン
バー多いんだね」

「そうですね。とくに私たちの班は多いみたいです」

「ほうほう」

佐天は顎に手を当てて身を乗り出してきた。顔を寄せると小声で
言った。

「それでさ、初春は気になる男とかいないの？」

「…ッ？」

顔を耳まで真っ赤にして距離を取る初春。

「なっ、なんてこと聞くんですか？佐天さん？そんなことっ……！」

「言える訳ないって？大丈夫大丈夫！こうみえて口は堅いからさ」

佐天は初春に好きな男の子がいると思っているようだ。そんな人いないと反論したい初春だが、気になっている人がいるので強く反論できない。

5分ほどしつこくきかれて、初春は口を割った。

「……佐川、先輩……」

「というと、茶髪黒縁メガネの人？なんで？」

「話してて楽しいんですよ。佐川先輩もコンピューターに詳しくて、話が合いますし」

ふーん、と顎に手を当てる佐天。そっかあ、ああゆつのが好みなんだねー、と呟いているのが聞こえる。

「そういう佐天さんはいるんですかー？」

一方的に根掘り葉掘り聞かれるだけでは納得できない初春は佐天に聞き返した。

「私はあの……すぐ別行動になった人、顔が好みだったなあ」

「ああ、高峰先輩ですね」

150センチオーバーのカーボンロードを背負った男を思い出す。

「高峰先輩、^{エアロ}空気操作系の都市トップなんですよ」

「へー」

佐天はレベルアップを使ったとき^{エアロハンド}空気使いの能力が覚醒したことがあるためなんだか共通項を見つけたようで嬉しそうだ。

「学園都市の空気使用の頂点^{エアロハンド}か……。どんな世界が見えてるのかな？ やっぱり操作も繊細なんだろうな」

「でも高峰先輩は操作が大雑把というか……訓練で5階建てのビルを半壊させたこともあるんですよー」

こんなことを本人のいないところで暴露してしまっているのか言ってしまうから悩む初春。その仮想空間内戦闘訓練で5階建てのビルを半壊させたとき、巻き込まれた、ということは伏せておこう。

「ああ、もうこんな時間になってんだ」

佐天が時計を見て叫ぶ、もう、1時半を回っていた。

明日は一緒にセブンスミストなどをめぐり、お買い物だ。6時間半は寝ないと体が持たない初春はそろそろ寝ないと明日に響く。

「じゃあ、そろそろ寝ますか」

二人でテーブルをよけて、そこにお客さん用の布団を敷く。

「じゃあ、おやすみー」

「おやすみなさい」

初春がハイベットに潜り込み電気を消す。暗くなった部屋にあり眠りについたのか。佐天の寝息が聞こえている。

（佐川先輩、かあ……）

言葉にしまったせいで、自分の気持ちを再認識してしまったのか。なんだか顔が火照る。

一度ゆっくり話してみても良いかも。

そんなことを考えながら、初春も眠りについた。

第11話 異変 (目覚めは最悪の報告とともに) (前書き)

第3章のスタートです！
それではどうぞ！

第11話 異変（目覚めは最悪の報告とともに）

夜中の三時、ひたひたと足音が聞こえる。

病院ではナースコールがあれば看護婦さんは動くから、足音がするのはそう珍しくもない。

とはいえ、今回だけは別である。足音がしている場所がおかしいのだ。

壁に張り付くように足音が聞こえる。そこには壁に張り付くように金髪の女が立っていた。

女がとある病室の前に来るとにやりと笑った。

窓ガラスに触れて、壊すことなく開錠する。中に入った女は足音をたてないように細心の注意を払って一つのベッドに向かう。

そのベッドに寝ている少女と女は面識があるわけではない。

ラストオーダー
打ち止め。

まともな名前すらもらえなかった少女を見つけ、回収してくる。
それが女に与えられた仕事だった。

少し熱を持ち、軽い体を抱え女は病院を後にする。

あとには風に揺れるカーテンだけが残った。

——総括理事会公認レポートより抜粋——

10月4日、午前3時11分、——病院312号室に入院していた少女が行方不明になった。

同25分、「ペリカンの翼」を名乗る団体から犯行声明がネットを使って発表された。以下に乗せるのはその原文である。ただし少女の人権を守るため名前を塗り潰しておく。

『これは我々の反乱である。』

腐りきった科学の進歩は我々を墮落させるだけではなく、全てを創造し、この世を治めておられる我らが父への冒涇である。

「科学のために」という大義名分を振りかざし人々を殺し、天使までも貶めた学園都市は全力を以て排除する必要があると確信している。

我々は■■■■■をこの手にとらえた。■■■■■が9月30日の事件の根幹に関わっていることを我々は把握している。

世界を代表して学園都市に要求する。

早急に非人道的な科学実験の凍結、天使を貶めたことに対する全世界への謝罪と技術を破棄せよ。

早急に対応しなければ、学園都市の愚かな選択によって多くの被害者が出るだろう。■■■■■が握っている情報も世界に広められるとも付け加えておく。

諸君らの懸命な判断を期待する』

同時刻を以て警戒レベルを第1種^{コールドレベル}警報に移行。

アンチスキル
警備員に出動命令を発令。

同5時30分、犯行グループを『魔術を冠する都市外超能力開発機関への協力団体』と認定。

よって、シティーセーバー特警隊に出動命令を発令した。

白井黒子が携帯電話の着信音で目を覚ましたのは朝の5時40分だった。寝ぼけ眼のままサイドテーブルに手を伸ばし、携帯をとる。

「ハイ黒子。こんな非常識な時間帯に電話をかけてくるのはどこのバカですのー?」

『わりいな、このバカは高峰颯太です、ハイ』

「なんですのよ、この朝早くから?」

『単刀直入に言う。誘拐事件発生、十分前に緊急出動命令ホットスクランブルが出た。さっさと準備してくれ』

一瞬で目が覚めた。掛布団を一気に剥ぎ取り、立ち上がる。

『そつだ、白井。お前御坂美琴と同じ部屋だったな』

白井は眉をひそめた。

「それがどうしたんですのよ」

『すぐかわってくれ。今回の事件おそらく彼女に関わる』

なぜこんなところで彼女がでてるのかいぶかしみながら、白井は隣で寝ている至極幸せそうに寝ている一つ年上の少女、御坂美琴に手を伸ばす。

美琴は意外にもあっさりとおきた。

「うつさいわねー。何でこんな時に起こすのよ。今いい所だったのに」

「わたくしだってお姉様の安眠の邪魔などしたくありませんのよ。というより、いい所ってどんな夢を見ていたんですの？ハツ？まさかわたくしとのラブラブな展開に」

「なるわけないでしょ」

美琴は隣でキーキーわめいている後輩を適当にあしらうと、白井の超使いにくい携帯電話を耳にあてる。

『御坂、よく聞いてくれ。誘拐事件が発生した。解決にはおそらくあなたの協力が必要になる』

「誘拐事件？そんなものアンタら特警隊^{シティーセーバー}ができれば一発なんじゃ……？」

『そうもいかないんだよ、誘拐佐荒れた相手が相手だしな』

電話の奥の高峰は苦々しげに言った。

『この件に妹達シスターズが関わってる』

美琴は一瞬耳を疑った。

「妹達シスターズ? アンタ今妹達シスターズって言った?」

美琴の声が一段階低くなる。

『ああ、さらわれたのは検体番号20001号、通称打ち止めラストオーダー。妹達シスターズの脳内ネットワークを総括する個体だ。』

「ちょっと待って、なんであんたが妹達シスターズのこと知ってるのよ? そもそも20001号なんて聞いたことないんだけど?」

『追及ならあとで聞く。打ち止めは御坂ネットワークの頭ヘッドだ。そんなものが誘拐されたってことはどういうことかわかるな?』

ラストオーダー

打ち止めが奪われたというのなら、ミサカネットワークが完全に相手にコントロールを奪われたことになる。9千体ものクローンが一気にあばれっ出す可能性が出てくるのだ。

『ともかく白井と一緒に来てくれ。犯人像をつかむきっかけに――』

』

高峰は最後まで言い切ることができなかった。

なぜなら、白井の部屋で窓ガラスが割れる音が響いたからだ。

飛び込んできたものの判別がつかない。しかしこの状況で二人に有益なものであるはずがない。

「お姉様ッ？」

白井が美琴に飛びつき、そのままテレポートする。

限界まで飛距離を伸ばし廊下に転がったところで二人の部屋が吹っ飛んだ。スプリンクラーが起動し大量の水が降ってくる。

『御坂！白井！大丈夫か？』

携帯電話がなり立てている。

「……大丈夫よ。今回ばかりはルームメイトが黒子でよかったわね」

『ともかく着替えてこっちにこい。そこにいると寮ごと吹き飛ばされかねない』

わかった。とだけ答えて電話を切った。

——総括理事会公認レポートより抜粋——

午前4時43分、第7学区、常盤台中学校学外寮に爆発物が投げ

込まれた。

超電磁砲レールガンの御坂美琴を狙ったと思われる。御坂美琴は同室の空間移動能力者とともに脱出し難を逃れている。

この件で寮内の生徒3人が重体、5人が軽傷を負った。

使用されたのは破片から学芸都市製の手榴弾『PKB75A』と思われる。

同53分、ペリカンの翼より犯行声明があつた。

特警隊はこれが長い1日の幕開けになることを知らなかった。

第12話 銃撃 (地獄は朝食の後で) (前書き)

遅くなりましたが更新です。

いまだにシツクリ来ていないかん満載ですが出しときます。

第12話 銃撃（地獄は朝食の後で）

とある有名な音楽家は言った。

「運命はこうに扉を叩く」

とあるツンツン頭の少年は言った。

「……まだ扉から入ってくるだけマシじゃねえか？」

上条当麻は呻いていた。

日曜日の朝っぱら、まだ7時にもなっていないうちに、どっかのバカが運命を大音響5・1サラウンドシステムで運んできやがったのだ。

防音性の高いユニットバスの中に寝ていたはずなのにジャジャジャジャーンとたたき起こされた上条は浴槽内で足を滑らせて後頭部を急騰口で強打していた。

その運命は『朝っぱらから大音響で流してんじゃねえ?』と至極まっとうな叫びによって去った。

「うー。結局不幸から上条当麻の日常が始まるのか」

二度寝するには遅すぎる時間だったのでサッサとおきる。ちょうど同居人である銀髪碧眼の純白シスターさんが朝のお祈りをしていた。

上条が出てきたことに気が付いたインデックスは、

「とうまとつま、なんでいきなり涙目で出てくるの?」

「それはね、でっかいモーツァルトがお風呂の急騰口を振りかざしてきたからだよ」

「さっきの曲はベートーヴェンの運命だと思うけど」

「そうなの?」

音楽なんてあんまし聞かなかった(聞いてもJ・POPが関の山)上条は、朝ごはんを作り始める。トースト、ベーコンエッグ、グリーンサラダ、牛乳の朝食四点セットだ。夕食はまた「そうめんアレシ」になるだろう。いまから『またそうめん?ヤダヤダヤダァ!』

と噛みついてきそうなインデックスをどうなだめようか考えている
上条さんである。

朝のお祈りが終わったのかインデックスはテレビをつけてチャンネルをコールしていく。時計を見ると7時30分。『マジカルバード超起動少女力ナミン インテグラル』が始まる時間だ。

「あれ？とうま。なんかテレビの端のほうになんか変なのが出てるんだよ？」

んー？と上条は目玉焼きの焦げ具合を確かめつつ、何の気なしにテレビを見る。

テレビの上のほう、いつもは時刻だけが表示されているところに
なんだかテロップが流れている。

「あー。「フーテン」第一級警報「フーテン」が出てるから出かけるのは極力避けなさい。つ
てとこだな。……ん？てことは今日の特売買いに行けないってこと
じゃないか？」

無能力者（レベル0）の上条当麻は奨学金も少なく特売日を逃すと生活が厳しくなっていくことになる。毎月4のつく日はスーパー
特売デーになっている店を最優先にしている上条にとってこれは痛い。

なんだかんだでやっぱり不幸なんだなーともう他人事のような域にまで達してしまった上条当麻。

そんなこんなで朝食の用意がととのった。さつそくものすごい勢いでベーコンエッグにがつくインデックス。あれだけのカロリーを摂取して、なぜ太らないのか上条は不思議でならない。

インデックスの膝にはスフィックスが陣取りおこぼれをかつさうつもりだろう。

外に出られなくなったのなら部屋でも片づけるかと呑気に考えていたら、いきなり上条の携帯が鳴った。

誰だ、とトーストをもそもそ食いながら携帯の表示を確認めると
高峰颯太 と出ていた。

「はいはい、どうした高峰？」

『上条か？今どこにいる？』

聞こえてきたのはほぼ叫び声に近い高峰の声だ。

「どこについて……？ふつうに寮で朝飯くってるけど？」

『あの子は……インデックスはそこにいるか？』

「いる、けどどうしたんだ高峰？」

いつも話すときは飄々とした受け答えをする高峰なのだがいつもと違う緊迫感に上条は眉をしかめる。

『説明は後？ともかく、今は窓から見えない位置に2人で隠れてる？』

「は？……ちょ、ちょとまで、どついうことだ？」

シテイセーバー
高峰は特警隊とかいう最近設置された風紀委員の上位部隊に所属していたはずだ。その高峰が隠れてると言ってきた。

それがどういうことか、わからないほど上条は鈍感ではない。

『コートレッシュ 第一級警報出ているだろう、テロリストがお前ら二人を狙っている可能性がある！今から迎えに行くからともかく物陰に隠れてろ？』

それだけ言うと電話は切れた。

（なんだっ たんだ？）

上条は通話の途切れた携帯を眺める。

「おい、インデックス」

「???」

上条が呼びかけるとトーストを口いっぱいに詰め込んだままこちらを見る。

上条が言葉を続けようとしたとき。

気づいた。

彼女のおなかのあたり、透明感のある赤い光が動いている。

とても小さく薄い光。それは――

（レーザーサイト？狙撃か？）

弾かれたように窓の外を見る。上条の決して悪くない眼は向かいのビルの屋上に誰かいるのを捕らえた。

とつさにガラステーブルを飛び越えインデックスに体当たりを喰らわせる。そのまま抱きつくようにして転がり、窓のすぐ横、おそらく外からの死角なるであろう場所に飛び込もうとする。

その直後。

ガラスを割って0・5秒前まで上条の頭があつた位置と0・25秒前までインデックスがいた位置に弾丸が叩き込まれた。

上条の右腕に小さいものの鋭い痛みが走った。インデックスはいきなりこっちにとびかかってきた上条の右腕を何かが掠っていったのを見た。

「インデックス？無事か？」

腕から血が滲んでいるのも気にせず、上条は叫ぶように目の前で目を見開いたまま固まっている少女に声をかける。

「私は大丈夫だけど、と、とうまが……」

俺は大丈夫だから、と安心させつつ窓の外を見る。

（どうなってんだよ？不幸なんてレベルじゃねえぞコレ？）

鋭い痛みに顔をしかめつつ、インデックスと三毛猫を壁際に追いやると、自分も死角に潜り込もうとする。

しかし日当たり抜群の南向きの窓の脇は二人が隠れるには狭すぎた。

外にいる狙撃手ははみ出した上条の体を狙ってくる。足のすぐ横、ほんの三センチのところに弾が突き刺さる。

ここで隠れてても死ぬだけだ。確信した上条は足に力を込める。

「動くなよインデックス？」

そう叫んで窓際を矢のように横切る。後を追うように何発もの銃弾が窓ガラスを木端微塵に砕きながら上条をかすめ飛んでいく。相手は狙いより弾数を選んだのか、狙撃中からマシンガンに切り替えたようだ。

いくら神様を殺せる右手を持っていても、なにも変哲もない鉛玉相手では勝ち目はない。

（死んで……たまるか？）

反対側の壁にスライディングするように飛び込むと銃撃がやんだ。
死角に入ったのだ。

インデックスに無事だと合図を送り、携帯電話を取り出す。相手
わもちろん警告をくれた高峰だ。

『上条か？無事か？』

「無事か、じゃねえ？思いつきり銃撃受けてる！」

『二人とも生きてる？』

「なんとかな」

電話の奥で高峰は安堵したような気配がした。

『じゃあ、あと30秒耐えろ。もうすぐそっちに着く』

上条は耐えた。予告された30秒がとてつもなく長く感じた。

45秒たったとき、ベランダから黒ずくめの男が2人飛び込んできた。

「上条！生きてるかー？」

「あ、高峰と……島田？」

「何で僕は疑問形なんですか？」

でっかいバックを背負った島田は不満げに笑う。特警隊シティーセーバーの二人は、黒に近い濃紺の防弾ベストの上に同色のロングコート。でっかいバックと御坂妹が持っていたようなマシンガンを持った島田と1メートルほどのロットを二本背負った高峰。

「……バリバリ特殊部隊、ってかんじだな。っておい！そんな堂々

と立ってて大丈夫なの？」

上条が思ったことを素直に口を出すと高峰は笑った。

「大丈夫なんだなーこれが。俺の能力忘れたか？」

「エアロウオール
気圧操作だっけ？」

「エアロウオール
空気バカ？」

「……君の聞き間違いには悪意をかんじるよ、インデックス」

高峰は苦笑いすると親指で窓の外を指差した。

上条とインデックスは窓の外を見る。弾は飛んできているがベランダの手前で弾かれている。

高峰の能力名の由来となった『エアロウオール 高圧の壁』が盾となっていた。

「気圧を極端に上げるとこんなこともできるんだよねー。あと島田ホットエアークレニションの高温着火で空気の温度を上げて飛び込んでくる破片を燃やしてる」

ホットエアークレノワー
「口先だけの無知な奴？」

「……わざとですかインデックスさん？」

島田はさつきから不満たらたらだ。だからと言って仕事を放棄するような人間ではないようで保護対象と合流したことの報告をしているようだ。

「なあ、高峰？何で俺たちが狙われてるってわかったんだ？」

上條は素直な疑問を口にした。

「0930事件あったらどう？」

上條の頭の中に浮かんできたのは雨の中での戦闘だった。上條を殺すために神の右席の前方のヴェントが学園都市に攻めてきた。その時に現れた天使のパーツにされた風斬氷華を救うために闘った。

「あれに関わった人間がどんどん襲われてんだ。打ち止め、超電磁砲^{ガッ}の御坂美琴。未遂だが妹達^{シスターズ}。そして次のターゲットがその天使の存在を解除した禁書目録と幻想殺しの上条当麻^{インデックス イマジンブレイカー}ってわけだ」

そんなことを言いながら高峰は外に目をやり、言葉を続ける。

「敵さんは『ペリカンの翼』を名乗ってる。おそらくローマ正教と繋がってるな。そうなるとどさくさに紛れてお前とインデックスを処分しかねない」

なんともなくスルーしようとしたが、上条は重要なことに気が付いた。

「……高峰、なんで俺とインデックスがローマ正教に追われてるって知っている？」

高峰はにやりと笑う。

「安心しな。仲間さ」

「お前、何者だ？」

高峰は窓の外に目を向けたまま告げる。自分の胸元に手が伸びている。

「俺は^{エアロウオール}気圧制御の高峰颯太。表向きは^{シテイセーバー}特警隊第七学区第一班副班長」

高峰が胸元からネックレスを引き出した。先にあるのは小さな銀の十字架。

「裏ではイギリス清教第零聖堂区」
「ネセサリウス必要悪の教会」
所属の魔術師な
んだなー、これが」

第12話 銃撃 (地獄は朝食の後で) (後書き)

いかがでしょうか

誤字脱字、感想ありましたらお寄せください。

第13話 逃走 (世界の保護と再構築を) (前書き)

なんだかんだで2週間も更新していませんでした。
これからテスト期間なのでさらに遅れる模様です。
気長にお待ちください。

第13話 逃走（世界の保護と再構築を）

「お前が……魔術師……？」

上条当麻は高峰の言葉に耳を疑った。

「ああ。悪いな、黙ってて。一応土御門のバックアップをメインにやってたし、できれば正体ばらさずここぞの時の隠し玉だった訳だが、今回は土御門が出払っててな。代わりに俺が来たってわけ、以
上了解？」

上条は話の急展開に目を白黒させていたが、インデックスはむっ
つりと黙りこんでいた。

「どうした？インデックス？」

高峰が聞くとゆっくりとインデックスが口を開いた。

「その首にかかった十字架、ふつうの十字架じゃない感じがするん

だよ。何の霊装？」

高峰はやっぱり気づいたか、と笑い。

「万が一の可能性を考慮してきみの『自動書記』ヨハネのペンを強制的に一時封印するためのものさ、出血多量など、魔術を使わないときみが助からない時以外、使えないようにする」

そういつてインデックスのほうに十字架を差し出す。インデックスがそれを受け取るとしげしげと眺めだした。

高峰は改めて十字架に触れると、口を開いた。

「一聖ジョージは魔の手から生贄の少女を救う S J S S G F D B
」

十字架が白い閃光を発し小さな風を生み出した。上条の視界が白く塗り潰される。キャツとインデックスの悲鳴が聞こえた。

閃光がおさまり、上条の視力が戻ってきたときに見たものは咳き込みながらうずくまるインデックスと十字架を首にかけて胸元にしまう高峰だった。

「てめ……、テメエ、インデックスに何をした？」

上条は高峰の襟首を持ち上げ叫ぶ。島田がインデックスに駆け寄り背中をさすった。

「自動書記を封印しただけだよ。彼女の体に問題は生じていないよ。
ヨハネのペン
今咳き込んでいるのは封印の時に呼吸器を一瞬圧迫されたからだ、すぐに収まる」

高峰は機械のように感情を極端に排除した声で答えた。

「それでも、それでもテメエはインデックスの仲間か？」

「仲間だからさ」

高峰はやはり感情を押し殺した声で答える。

「インデックス禁書目録が敵の手にまわった場合、精神を乗っ取り、戦闘に使わ

れる可能性がある。その場合に自動書記ヨハネのペンが使用されたら、こちらに
ほぼ勝ち目はない」

「んなこといっても実際にインデックスは傷ついてるじゃねえか？」

「じゃあ、一瞬の痛みを押し付けさせたくないために、彼女に大量
虐殺の加害者になることを押し付けるのか？精神を乗っ取られてい
る間は彼女は覚えていないだろう。だがそのあとは？何一つ忘れら
れない彼女に罪悪感を背負わせるのか？」

「だからって……」

「とうま」

そのときインデックスの声が割り込んだ。

「私は大丈夫だよ？それよりも、そうたのほうこそ大丈夫なの？」

インデックスの言葉に島田、上条は高峰を振り返る。頬のあたり
から血が滲んでいた。

その症状に上条は思い当たるところがあった。

超能力者に魔術は使えない。

超能力者が魔術を無理やり行使した際の拒絶反応である。

「た、かみね……？」

「俺は発動のきっかけを与えたただだ。まともに使ったらもっと酷いことになる。土御門と違って回復できないからな」

上条は黙る。その魔術でインデックスが苦しんだことを上条は許すことはできない。最悪の事態を防ぐためには、インデックスを奪われないようにすればいいだけだ。それだけなのに、インデックスに苦痛を背負わせることは、許されることではないはずだ。

しかし、高峰は必要な処置だといい、魔術のリスクを負った。インデックスは大丈夫だといった。

そのうえで、反論することは不可能だった。

島田が背負ったバックをおろした、高峰が頬の血を拭きつつ言った。

「納得したらさっさと脱出しようぜ。この建物もいつまでもつか分からないからな」

十月とはいえ、コートを着て走るのは暑い。

上条はそんなことを考えながら、逃げる。前を走るのと同じようにコートを着たインデックスといかにも特殊部隊的な格好の高峰だ。なんでも防弾素材のコートだそうで、銃撃で死にたくなければ来ておけ、とのことだった。

平時なら目立って目立って仕方がない格好だがしょうがないだろうが、^{コートレッシュ}第一種警報下の街中、しかも、テレビで外出禁止を訴えるような状態では人影はなく、どんな格好でも目立ってしまうだろうが。

「なあ、回収車ってまだなのか？」

上条は後ろを走る島田に声をかける。

「もうすぐです。その角を曲がると第二班の回収車が待っているはずです」

第二班はおそらく特^{シテイセーバー}警隊第七学区第二班のことだろう。寮から500メートル以上路地を抜けてランダムに走ったあと、結構な距離を走っている。警^{アンチスキル}備員の援助も受けて何とかここまでたどり着いたというわけだ。

角を曲がって大通まで出る。高峰たちを認めてか、止まっていた宅配便のトラックから、ごつい男が出てきた。宅配会社の制服を着ているが胸元にはその業者のものとは違うエンブレムがついている。

翼の生えたグリーンの盾に三又の^{トライデント}鉾が重なったもの。特^{シテイセーバー}警隊のものだ。

島田がほつとしたような声を吐いた。上条も安心をして気を抜いていた。高峰も護送の第^{ファーストステップ}一段階を終えて安心していた。

その時だった。

インデックスの肩がピクリと動いた。ワンテンポ遅れて高峰が急に止まった。

「動かないで？」

インデックスが叫んだ。その直後――

宅配便の男の鼻先をかすめるように衝撃波が走った。

バキバキバキ！とアスファルトが碎ける音がして、粉塵で視界が埋まり、男の姿が見えなくなった。

「ちいっ……？」

高峰が背負ったロットに手を伸ばす。ホルダーから外した勢いを殺さずそのまま振り下ろす。

ヒュバン！と空気が切り裂かれ高圧空気の固まりがロットの先から放たれる。高圧の空気は周りの空気を巻き込み大きくなって衝撃波の発生元へと飛んでいく。

しかし、間に合わなかった。

もう一発、衝撃波が飛んできた。高峰が作った高圧空気を切り裂いて上条たちに襲い掛かる。

高峰が作ったのは高圧の空気の塊。対して衝撃波は薄いブレードのようで、断面積が小さく高圧空気では止めきれなかったのだ。

バットエンディングまであと、0・3秒。島田がとっさに目をつぶったその時

「照準を右方に変更（CSR）」

落ちていたインデックスの音が聞こえた。それに反応したかのように、衝撃波がカクンと右に逸れ、飛んでいき路上駐車中のワンボックスをぶっ壊して止まった。

衝撃波が、インデックスの言葉に反応した。

彼女には魔力は使えない。しかし頭の中にある10万3000冊の魔導書の知識を使って魔術に介入できる力を持っていた。

スベルインターセプト
強制詠唱

それに反応したということは――

（……魔術攻撃か？）

上条がそう思った後同時、立ち上る粉塵の中から、声が聞こえた。

「おおーおおー。さすがはIndex Librum Prohibitorum。あっさりとは介入されるとはおもってなかったなあ。いやいや、すごいすごい」

ゆらりとあらわれたのは金髪の男だった。190ぐらいの身長で筋肉質な体つき。髑髏がでかかとプリントされたシャツを着ている。

その右手には、――鞭。

「なるほど、フラグラム、か」

高峰がそういうと、金髪男が驚いたような顔をした。

「へえ、知ってんだ、これ。驚いたな、さっきの空気の攻撃超能力だよな？超能力者ごときがなんで神を討つ鞭なんて知ってんだ？」

フラグラム

金髪男が鞭を掲げる。よく見ると先端に何かの骨やら、金属やらがついている。

フラグラム
神を討つ鞭。

神の子の処刑の前、人々は神の子に鞭を打ってから十字架に張り付けた。神の子を打った鞭は霊装として機能する。

「人体の骨を断つための鞭を拡張して何でも切り裂けるようにしたんだよ、その術式、スペイン星教派の香りがするね」

インデックスがそういうと高峰が苦々しげに笑った。

「まあ、元スペイン星教だな。まあいいや。お前らもこっちのやりたいことわかってんだろ？」

「SMグッズのセールスか？それなら事足りてるから結構だ」

威勢がいいな、と金髪男が言った。高峰はロットを握り直し、金髪男は鞭を掲げて笑った。

「まあ、こっちとしては禁書目録だけ生きてればいいんだし。悪いがここで死んでくれ。一応名前を聞いといてやるよ」

余裕な顔で金髪男は笑う。

「ここでは治安維持部隊『シテイセーバー特警隊』の高峰颯太と名乗っておこうかな」

「ふうん。俺はフェルナンド・タレスだが、こっちのほうがふさわしいだろう」

男は叫び、鞭を振り下ろした。

「一再び世界を回す者（Revolver0397）？」

高峰が前へ跳ぶ。大量の風が動く。

市街地での戦いが始まる

第13話 逃走（世界の保護と再構築を）（後書き）

次回から戦闘シーンメインですが、もう苦戦しています。
そろそろ一方さん御登場？

第14話 逃走 (最優先事項は何か) (前書き)

テスト直前に何やってんだろう。おれ。

第14話 逃走（最優先事項は何か）

電話が鳴った。

（こんなことで前は起きなかったのによオ）

能力が使えないことは不便だ。と、白い髪的能力者は呟く。

学園都市のどこかわからない一室でむっくりと起き上がる能力者。白いトンファーのような杖を取って立ち上がる。

アクセラレータ

一方通行。学園都市最強の能力者だ。

サイドテーブルに置いてあった携帯電話を取ると『非通知』と表示されている。

アクセラレータ

疑問に思いながら一方通行は携帯を耳にあてた。

アクセラレータ

『やっと繋がったようだね？一方通行』

流れてきた声には聞き覚えがあった。語尾が疑問形で終わるふざけた口調に一方通行は眉をひそめる。
アクセラレータ

「なんでオマエがオレの携帯番号を知ってんだ？」

『患者に必要なものはなんでも揃えるのが僕の信条でね？それが患者に必要ならセキュリティを破るくらい躊躇わずにできるんだよ？』

君の番号を探るのにかなり時間がかかったけどね？と続ける医者アクセラレータの声を聴き、一方通行の背中に何か冷たいものが流れた。

「どういうことだア？オレはもオ退院して用はないはずだよなア？
なんでオマエがオレに——」

『単刀直入に言おう』

アクセラレータ
喋る一方通行を遮ってカエル顔の医者が言った。その語尾がこれまでのふざけた口調から切り替わっていた。

アクセラレータ

一方通行はその口調を知っていた。9月30日の雨の中、電話越しに諭された時と同じものだ。

その時と状況が酷似している。そしていまだにその医者のもとに

アクセラレータ

「患者」としていて、一方通行に關係ある奴は一人しかいない。

まさかあのガキに何かあったのか。

そんな予想を立ててカエル顔の医者 of 言葉を待つ。

ラストオーダー

打ち止めが何者かに誘拐された。彼女を助け出してくれないか」

予想通りがこんなことだなんて最悪の気分だ。

「なんだア、どこのどいつだ？」

『よくわからないが、学園都市の人間ではなさそうだ。「ペリカンの翼」を名乗る宗教団体から犯行声明が出ている。もう捜査に警備員や特警隊が出ている』

「シティーバー 特警隊？」

『アンチスキル ジャッジメント 最近できた警備員と風紀委員の選抜メンバーで作られた組織だ』
一方通行はそれを聞き眉をしかめた。

「話にならねエな。そんなお遊び治安維持部隊じゃ食いつぶされる」

『僕は患者にこんなことを頼むのは許せないけど彼女を救うにはこれが一番確実だと思ったからね。なんとか連絡をつけたってわけさ』

カエル顔の医者はため息をついた。

『これからずっと僕は病院にいる、助け出したらここに回してくれ。ここまで生きて回して来たら必ず助けよう』

そう断言するカエル顔の医者にそかいとだけ答え電話を切った。

「……………くっそつたれが」

電話を握りつぶす勢いでこぶしが握られる。

それに悲鳴を上げるように携帯電話が着信音を鳴らした。

表示はまた『非通知』。

電話に出ると医者の声ではなかった

『仕事ですよ、アクセラレータ一方通行』

その『声』はいつも仕事を持つてくる憎々しい声だった。

「わりィが他あったてくれ。今から俺は忙しいんだ」

アクセラレータ
一方通行がそういうと『声』が笑った。

『あなたはこの仕事は受けると思いますけどね』

眉をしかめた彼に声は告げる

『ラストオーダー最終信号をさらったペリカンの翼を潰してくる仕事ですよ』

風が動き、衝撃波が舞う。

戦場だ。と上条は呟く。

3分前まで何の変哲もない学園都市の一風景だったが、今では道路が切り裂かれ、アスファルトが吹き飛び、建物にひびが入っていた。

どんな兵器を使ったのか、と魔術の知識のない者は思うだろう。その戦いを見た者でなければ個人対個人のものだと思っまい。

フングラム
神を討つ鞭を使うフェルナンドと名乗った金髪男は鞭を振るい鞭だけではありえないほどの衝撃波を生み出し地面、空気、ありとあらゆるものを切り裂いていく。

エアロをウォール
高峰颯太は自分の能力、気圧操作を駆使し相手に迫る。カーボンロッドが風を切り、高圧空気の弾丸、真空刃、急減圧による液体の沸点の操作など、自分の能力を最大限に活かし相手との距離を詰めようとする。

だが、どちらにも決定打が出ていない。

高峰の気圧攻撃がフェルナンドに当たらないのだ。

（ちつくしょう、大ヤコブの加護による高速移動術式か、分が悪いな）

何度も目の前の金髪男に高峰の攻撃が食い込む直前、男の姿が掻き消える。その直後高峰の死角に現れて鞭が振り下ろされる。

大ヤコブの高速移動術式。

攻撃を受ける直前、つまり、攻撃が体に食い込む寸前に、高速移動で攻撃が及ばない範囲まで移動するものだ。

座標攻撃など前兆がなくピンポイントで攻撃ができれば破るのは簡単だ。しかし気体しか操れない高峰にはそんなこと不可能だった。

相手が圧倒的に有利。それでも高峰がまだ倒れていないのには訳がある。

「攻撃を停止（SSA）」

インデックスの声が飛ぶ。背後から鞭を地面に叩き込もうとしていたフェルナンドの右手が不自然に止まる。

スベルインターセプト
強制詠唱。それがなければ、高峰はとっくに切り刻まれて路上の染みになっていたはずだ。

「……どうなってんだよ」

上条の横で呟くのは島田だ。魔術というものを初めてみるのだろう。自分の炎もその手の中にあるサブマシンガンも通用せず、返り討ちにあって右肩を押さえている。インデックスの援助で直撃は免れたものの、吹き飛ばされたアスファルトに肩を切り裂かれたのだ。

「ふうん、思ったより粘るね。いくらインデックス禁書目録の援助があるとはいえ、ここまでもったのは称賛に値するね」

敵の魔術師はにやりと笑い高峰達から距離を取る。

いや、正確には「上条当麻から」距離を取ったのだろう。

フェルナンドの強みは大ヤコブの高速移動術式であり、これがあればほとんどの攻撃をかわすことができる。

しかし、イマジンプレーカー幻想殺しからは？

そう、上条当麻の右手なら、フェルナンドを捕らえることができる。

エアロウオール
高峰の気圧制御からも島田の高温着火からもサブマシンガンの弾
幕からも無傷で生還したフェルナンドも、上条のただの右手から逃
れることができない。

上条がフェルナンドに向かって飛び出そうとしたその時。

「上条、とまれ」

高峰が言った。

「いま最優先するべきは、そいつを倒すことじゃない」

このタイミングだ何を言ってんだ？と上条はいぶかしむ。同じ疑問をフェルナンドも持ったようだ。

「ほう、俺を倒す以外になにか生き残る方法があるとでも？」

あるさ、と気楽に高峰は言う。

「こんなのはどうだ？」

その言葉に呼応するように戦いでボロボロになった交差点にビツクバイクが突っ込んできた。驚きに染まるフェルナンドを囲むかのようにオレンジの炎が爆発的に燃え上がった。

「高峰君？」

バイクが高峰たちの前でドリフトするように止まった。ライダーはかなりグラマーな女性らしい。

「ナイスタイミングです。固法先輩」

驚く上条とインデックスの真横に虚空から人影が現れた。

「まったく、油断して仕事を増やさないでいただけませんか？こっちは連続の使用で面倒ですよ」

そういつて現れたのは常盤台の制服を着たツインテールの女学生、白井黒子だ。

「ははは、わりい」

そういつて島田がインデックスの手をつかむ、上条から引き離すと島田とインデックスを連れて白井がテレポートで虚空に消えた。

「上条！バイクに乗れ！さっさとこの場から離れる？」

島田が消えたことで、フェルナンドを囲んでいた炎が消え、今にも鞭を振りかざそうとしている。

上条がバイクの後席に飛び乗ると固法先輩と呼ばれた人物がアクセルをふかす。

急発進した反動で振り落とされないよう必死にドライバーのおなかにしがみつく上条を見送ると、高峰はフェルナンドと向かい合う。

「……やってくれたな」

そうだけ言つて鞭を振り下ろすフェルナンド。高峰に向かって衝撃波が走る。

高峰は取り合わず避けた。

空気が動き、高峰の体が弾丸のような速度で舞い上がる。そのま
ま風を起こし、上条のバイクを追うように空を駆ける。

最優先事項は敵を倒すことではなく、対象の保護だ。

ここで逃げない理由はない。

第14話 逃走 (最優先事項は何か) (後書き)

次回は御坂さん再登場？

第15話 現状（まずは最悪の状況を認識し）（前書き）

今回は説明メインなのでつまらないかもしれませんが。

第15話 現状（まずは最悪の状況を認識し）

「うう、不幸だ。なんで訳も分からずバイクでここまで連れてこられて、インデックスに噛みつかれなきゃいけないんだ？」

上条が頭に齒形をつけてトラックの荷台に転がった。

「とうまが女の人のおなかにしがみついて嬉しそうなのがいけないんだよ」

そんなことを言っているのは上条の隣に立ったインデックスだ。横で大笑いしているのは空から降りてきた高峰颯太だ。能力を使ってビルからビルに飛び移りながら上条の逃走をサポートしていたらしい。

「なあ、この車ってなんなんだ？」

上条がそう聞くと高峰が答えた。

「シテイセーバー特警隊の展開用車両ってところだな。一応装甲車だから気休めぐらいにはなるだろう」

改めて蛍光灯で照らされたトラックの荷台を見る。奥では先の戦闘で右肩に傷を負った島田が治療を受けており、両脇には武器を満載した棚、十数人が座れるスペース。かなり大型トラックだ。動き続けているはずだが音もなく進み動いているのか止まっているのかわからない。

「ふうん、シテイセーバー特警隊の装備ってすげーな。メンバーってこれだけなのか？」

「まさか、初春と佐川が別の場所でパソコン片手にバックアップしてくれてるさ」

高峰がカーボンロットを下しつつ言った。

「で、またアンタはトラブルに巻き込まれてるのね」

そんなことを言ってなぜか前髪からバッチンバッチン電撃ビリビリをとばしながらいうのは御坂美琴だ。

上条が力なく笑うと島田の手当てをしていた女性が立ち上がった。

振り向いた顔に見覚えがある。

黄泉川愛穂だ。

「高峰くん、そろそろなんで月詠センセのこの子とシスターちゃんが狙われたのか話してほしいんだけど。救出してから話すって約束じゃない？」

皆の視線が高峰に集まる。高峰はたつぷり数秒躊躇うように黙ったあと、ゆっくりと口を開いた。

「……そのためには、まず僕の正体と所属組織について話さなくてはなりません」

しんと静まり返った荷台に高峰の声が流れる。

「自分はイギリス清教第零聖堂区『ネセサリウス必要悪の教会』という組織に所属する魔術師です」

ま、じゅつし？と美琴が訳が分からないという顔で高峰をみる。

「正確には話せないのですが、学園都市のシステムとは違う方式でフォーマットされた超能力者、とも呼べるものです。神や天使といった力が存在すると仮定し、そこから力を引き出し、行使する。

——そんなことをするのが、『魔術』であり、『魔術師』である、

そう思ってもらってかまいません」

正確には違うんですけどね、と高峰が付け足す。

「白井と御坂、それと黄泉川先生も一度魔術師と戦ってますよ?」

「「え?」」

いきなり話を振られて素っ頓狂な声を上げる白井と美琴。黄泉川は急いで過去を振り返っているようだ。

「今年の9月1日、地下街での外部の人間による破壊行動。アレをやったのは魔術師ですよ」

白井があからさまに嫌な顔をした。あの女魔術師に殺されかけたのだからしょうがあるまい。

「まあ、あんなことにならないように裏からいろいろ調整するのが自分たちの役割なんですけど、学園都市側から止められたりするのであまりいいってないんですけど、——話を戻しましょうか」

高峰が純白シスターのほうに視線を向ける。

「この子は自分と同じ『ネセサリウス必要悪の教会』のメンバーで、Index - Librorum - Prohibitorum——禁書目録と呼ばれています」

皆の視線が今度はインデックスに集中する。

「彼女には完全記憶能力という体質があつて、それを使って何万冊もの魔導書を頭の中に保管しています」

「そんなことが……？」

黄泉川が呻くように言った。

「あるんですよ、先生。彼女自身は魔術を使えません。しかし、頭の中に入っている魔導書テキストはこの世界のほぼ全ての魔術を網羅しています。彼女の知識は魔術のプロが危険すぎて手を付けられないと判断して封印してきたものばかりです。一度に何万人もの人々を消し去る威力を持つものも少なからず存在します」

高峰の声が一度止まる。

「そんな彼女が、『危険思想を持った魔術が使える相手』に連れ去られたらどうなると思いますか？」

皆が息をのむ。

「彼女の知識には戦略核弾頭並みの危険性ははらんでいます。それを——禁書目録の知識があれば一瞬で学園都市が地図から消えかねないんですよ。それに」

高峰が上条を見る。

「上条当麻も問題です。三沢塾攻略戦、大覇星祭の時の使徒十字発動阻止戦、キオツジアのアドリア海の女王の破壊、0930事件時の神の右席前方のヴェントを打ち破った。科学側の事件では絶対能力進化実験及び量産能力者計画を破たんに持ち込んだってのもある」

高峰はすらすらと事例を並べ立てる。美琴が顔をしかめて、目をそらした。

「8月以降いくつもの事件を解決、および犯行グループを壊滅させてきた上条当麻が危険人物としてブラックリスト入りしてるというわけです」

「ブラックリストって、俺そんなすごいことしたか？」

「妹達一万人以上救ってアニエーゼ部隊250人を救いだし、ロー
マ正教の隠し玉をぶっ壊しまくった張本人が不思議そうに言わない
の」

高峰がそういった時、トラックの荷台の空気を壊してけたたましく警報が鳴った。

『黄泉川先生！緊急です！』

スピーカーから流れてきたのは、初春飾理の悲鳴に近い声だ。

「どうした、初春」

『学園都市セキュリティシステムがクラッキングされました。HS
AFH-11が三十機ほどそちらに向かっています！』

第15話 現状（まずは最悪の状況を認識し）（後書き）

次回は御坂たん大活躍？

第16話 迎撃（迎え撃つべき敵に立ち向かい）

「H S A F H - 1 1 ……？」

高峰達を乗せたトラックに緊張が走る。

H S A F H - 1 1。通称『六枚羽』

学園都市の科学技術の結晶ともいえる無人攻撃ヘリだ。

「おいおいおいおいおい。まずいぞコレ」

高峰がロットを手取る。島田も御坂も立ち上がった。話についていけない上条、インデックスは置き去りである。

「御坂、手伝え。ミサイルだけでも落とすぞ」

「あんた、命令してんじゃないわよ」

高峰がトラックの壁についているボタンをいくつか操作した。天井の一部が開き、青空が見える。そこから高峰はトラックの上に飛び上がる。

「初春、コントロールシステムをクラッキングしろ」

『高峰先輩？つちよ、無理ですって、セキュリティランクS超えてえますよ』

初春が無線の奥で叫ぶ。高峰はそれに負けないように叫んだ。

「何とかしろよ、^{ゴルキーバー}守護神。そもそも今使ってるコンピューターはAランクじゃねーか。一つぐらいランク飛ばすのは簡単だろう？」

『無茶言わないでくださいよ？』

叫んでいる高峰の横に御坂美琴が、学園都市の第三位が上がってきた。

横目でそれを認めつつ、高峰は無線機に叫ぶ。

「君にしかこれはできない。三十機の戦闘ヘリ相手に戦うのは少々つらい。頼む、何とかしてくれ」

無線が沈黙する。極度の緊張状態にあるためか、荒い吐息が聞こえる。

『……………15分、いや、10分耐えてください。何とか崩してみます』

その答えを聞いて、高峰はニヤリと笑った。

「サンキュー、初春。頼りにしてるぜ。佐川、そこにいるか？」

『なんですか』

「こっちのバックアップ頼むぜ」

隣では御坂が電気をためているのか、前髪からバツチンバツチン火花を飛ばしながら空を見つめていた。高峰も同じ方向を見つめる。

三十を超える金属製の物体が、豆粒のように見えている。

（——頼りにしてるぜ、ゴールキーパー守護神。それまで俺が守って見せる）

アクセラレータいまさら裸電球が下がる部屋って珍しいんじゃないだろうか、と一方通行は素直に思う。

「土御門の野郎はどこにいるんだア？」

さあね、ときしむソファに転がっている一方通行の向かいで興味アクセラレータ

なさげに言つのは結標^{むすじめあわき}淡希だ。

「やっぱり、最強さんにとっては、あの金髪がいないと不安かしら？」

「その舌引き抜くぞ、ボケ」

結標と一方通行^{アクセラレータ}睨み合っている横では黒曜石のナイフを研いでいる海原がいる。

「どうやら、『ペリカンの翼』に捕まってるみたいですネ。生きてたらついでに回収しておくようにって指示も出てますよ」

土御門が捕まった？一方通行^{アクセラレータ}は眉をピクリと動かした。

「ケータイとかよオ、なんか持ってンじゃないのか？」

「もってても、回収されてるか壊されてるかでしょうね。中身は^{データ}コピーして保存つてどこかしらん」

「めんどくせエ」

彼らは利害が一致しているから一緒に行動しているのであって、それ以上のつながりはない。ミスった奴のしりぬぐいなんて御免だった。

「恩売っておくにはいい機会じゃない？」

結標がそついうと海原がナイフの研ぎ具合を見ながら口を開く。

「それよりも、上がなぜ場所を伝えてこないのか、不思議じゃありませんか？」

「勝手に調べろ、ってことかしらね」

アクセラレータ
一方通行が立ち上がり、部屋の外へと続くドアを開ける。

「どこに行く気ですか」

海原に聞かれ、振り返らずそっけなく答える。

「情報知ってそオな奴に心当たりがある」

「ご一緒しましょうか？」

「核撃つても死なねエ奴に付き添いはいらないだろオな」

それだけいって外に出る。

目指すは第七学区の一角、ある病院。

そこには学園都市第三位にそっくりな女がいたはずだ。

「御坂、先制攻撃仕掛ける！超電磁砲はどれぐらいの精度で打てる？」

高峰は装備品であるゴーグル型のディスプレイを着けつつ御坂に聞いた。クリアディスプレイに佐川から送られてきたレーダーの映像、敵機までの距離、速度、兵装など、様々な情報が映し出される。

「大体、50メートル先で誤差10センチ未満ってどこかしら」

「オーケー。じゃあ、300メートルまで近付いたら超電磁砲お見舞いしてやろうぜ」

「ちょ、わかつてるの？超電磁砲は射程が50メートルそこそこよ。300メートルなんて」

焦ったように言う、美琴を高峰は手で制した。

「おれが誰だか忘れたか？」

「……なるほど」

高峰の意図を御坂は理解したらしく、凶暴な笑みを浮かべるとコインを取り出す。

「密集して飛んでる、真ん中の奴から落とそうかしらね」

了解、と高峰が答えたのと同様、キン、と澄んだ音を立ててコインが放物線を描き出す。

学園都市第三位、その異名となった、凶悪な一撃が放たれる。

超電磁砲。
レールガン

それは、過たず一機250億円の『六枚羽』を射抜き、爆発させた。その破片にやられたのか、まわりに飛んでいた三機ほどの期待を巻き込み落ちていく。

強力だが射程が50メートルそこそこしかないはずのコインが300メートルの距離を渡る。

理由は単純。

エアロウオー
ル
気圧制御が射線上の気圧を限りなく下げて、真空に近い状態を作り出したからだ。

空気がなければ摩擦熱でコインが溶けることもなく、速度も失わない。

オレンジ色の閃光もなく、衝撃波もほとんどない。派手さはないが効果はある。市街地戦にもってこいだ。

「つと、300メートルも離れているとコントロール難しいな」

高峰は爆発でコントロール不能になった機体を能力を使って道路の上に落としていく。火薬満載の軍用ヘリを学生寮に突っ込ませるわけにはいかない。

敵は近づくことをあきらめ、その距離からミサイル攻撃に切り替えたようだ。何本も——おそらく25本ぐらいだろう——白い噴煙が高峰達に襲い掛かる。

しかし、その攻撃は届かない。

これも理由は単純。

御坂美琴が電磁波で起爆装置を誤作動させたからだ。

オレンジ色に視界が染まる。目を開けていられないほどの光量とともに、爆風がトラックを叩く。

『高峰、気をつける？機体が接近してるぞ』

無線越しに佐川の叫びを聞き慌てて目を開ける。ちょうど炎の幕を突破して一機のヘリコプターが姿を現した。凶悪なHSGG-03A、13ミリガトリング砲がこちらを捕らえた。

（畜生、この炎ん中超えてくんのかよ？しかもロックオン済み？）

高峰はロットを横一線に薙ぐ。それに呼応するように空気が動く。ガトリング砲が火を噴くと同時、六枚羽の尾^{テール}つぽがかくんと下がった。確実に高峰達をロックオンしていた弾丸はあさつての方向に飛んでいく。

そのまま気圧を操作し続け、地面に六枚羽を叩き付ける。

ドガガガッ！とアスファルトを削る音とともに炎上した機体を置いていくようにトラックは速度を上げる。

ひたすらに逃げる。逃げながら学園都市の科学の結晶ともいえる六枚羽を叩き落とす。

そんなことができたのは、もとのポテンシャルが高かったせいか。

あと、10機、そうだった時だった。攻撃機がくると反転した。

「……！やりやがったな、ゴールキーパー守護神」

『高峰先輩。HSAFH-11のコントロールシステムのクラッキング完了しました。ちゃんと攻撃やめますか？』

「ああ、今転進していった。8分43秒、やるじゃないか」

いえいえと照れくさそうに笑ったこえがする。

平和が戻ったかと思われたその直後。

いきなり、虚空からミサイルが現れた。

「ッ？」

いきなりトラックの進行方向からミサイルが高速で飛来する。御坂美琴の電磁波攻撃も高峰の気圧操作もいきなりの攻撃で頭が混乱して、演算が整えられない。

なすすべもないままミサイルは迫り。

オレンジの炎がトラックを包んだ。

しかしミサイルの炎ではない。

島田の高温着火によるものでもない。
ホットエアーイグニッション

炎がミサイルを爆破させ、その炎を取り込みさらに大きくなる。

「なんなの……？」

美琴の疑問もよくわかる。こんなこと大能力者でもできるかどうかかわからない芸当だ。

炎は動きを変え、ミサイルが飛来した方向を叩く。空に擬態したヘリコプターが炎に包まれ落ちていく。

「島田、あれぐらいできるよになると、超能力者判定でるんじゃない？」

高峰の視線の先には男がひとり。

「フン。彼女を守る使命を帯びてるんだからこれぐらいやってくれないと困る」

タバコをくゆらせる男に高峰は声をかける。

「待つたぞ、スタイル」

第16話 迎撃 (迎え撃つべき敵に立ち向かい) (後書き)

シリアスなものが続きます。

第17話 回収 (守るべきもの、奪うべきもの) (前書き)

シリアスが続きますって書いたのどこのどいつだ？
少しでもメディータッチも入れてみました。

第17話 回収（守るべきもの、奪うべきもの）

「ヘリからの攻撃があつた……？」

初春は同僚の佐川が言つた言葉に耳を疑つた。

だって、攻撃ヘリのコントロールシステムは全部掌握しているはずですよ。レーダーにもそんなもの映つてませんでしたよね？」

隣で画面を睨んでいた佐川が大きなインカムを外しながら言つた。

「ステルス機、かな。こちらが把握できないシステムがあるのかも」

そういつて、佐川はコンソールを叩く。現れたのは学園都市のセキュリティ関連の情報だ。

「見たところ不審なものはない、かな？でもなあ、こうして二人でダブルチェックしていた状態でそんなヘリサイズの大きな物体見逃すかなあ」

「おかしいですよね」

黙り込んでしまう2人。監視衛星画像を見ても、異変は察知できない。電磁波レーダーも赤外線レーダーも学園都市第三位がいたり、ヘリが落ちて炎上しては意味をなさない。

どうしようか、と初春が呟いた時だった。

学園都市のセキュリティシステムに『直接』メールが届いた。

（メール？そんな馬鹿な）

この学園都市のセキュリティシステムはメールアカウントなんて持っているはずがない。

初春は送られてきたメールをシステムから切り離し、その上でメールを開いた。

Dear 初春飾理

だいぶ腕を上げたじゃないか。きみの善戦を期待する。
ファントムマスター
幻影使い

ファントムマスター
「幻影使い……」

初春の呼吸が確かに一瞬止まった。

「初春さん？」

佐川の声にも応答しないで、画面を食い入るように見る。

手に嫌な汗を握った初春は、目を閉じ、深呼吸をして、再び目を開ける。

この幻影を止めるため、キーボードを叩く。

怪しい、神父さんが現れた！
どうする？

▼にげる

▼たたかう

頭の中にこんな選択肢が浮かんでしまった島田は急いでその考えを振り払った。

よくわからないが、どうやら高峰颯太の仕事仲間で、上条当麻やインデックスの顔見知りの魔術師らしい。

「ふーん、君が月詠センチが言ってた喫煙不良少年じゃね」

黄泉川がそういうと、ステイル「マグヌス改め喫煙不良少年は盛大にむせた。

「悪いけど、このトラックは禁煙じゃんよ。そのタバコは私が預かっておくから、ね？」

笑顔で右手を差し出す黄泉川愛穂。対してステイルは。

「フン」

とだけ言っで、さらにタバコをつける。

横で見えていた上条は黄泉川の頭の中の大事な線がブチリと切れるのを確かに聞いた。

直後、

「大人のいうことは素直に聞くじゃんよー」

「いふぁアッ？」

ものすごくフラットな叫び声で黄泉川は拳を飛ばし、ステイルはおもしろいぐらい飛んだ。

どうやったのか、黄泉川の手にはステイルのものだったであろうタバコの箱が握られている。

「しっかり大人の忠告は聞いとくようにしないといつか痛い目にあうよ」

黄泉川の声にかぶって、スピーカーから報告が流れってくる。

『第二班固法です。姫神さんの身柄確保しました。このまま保護します』

「姫神？なんでここで姫神が出てくるんだ？」

上条が素直に思ったことを言つと高峰がステイルを起こしながら答えた。

「ペリカンの翼はインデックスと上条を狙ったからな。2人の動きを止めるために誘拐される可能性があったからさ。彼女は吸血鬼への切り札だから、誘拐した後も活用できるしな」

高峰はそういいながら暴れるステイルの懷から容赦なく巻きたばこを奪い、黄泉川に渡していた。

「よい機会だ。禁煙に挑戦したらどうだ？」

「ニコチンとタールのない世界の名前は地獄というんだが？」

「タバコなんて嗜好品を手放せない時点で神父としてどうなんだ？」

高峰とステイルの会話に割り込んだ上条はステイルにキッと睨まれた。

ふん、とだけ言ってそっぽを向くステイル。

また、無線機がなった。

『コントロールの初春です。第一班、聞こえますか？』

「どうした、初春」

トラック備えつけのマイクを取ったのは高峰だ。

『怪しい集団を見つけました。トラックから離れていく方向ですが、遠くないので警戒してください。どこかへ向かっている様子なので、マークしています。いま画像送りますね』

その直後、とらつくに積んであったコンピュータに映像が次々と送られてきた。

装備は『外』の世界の最新の奴らしい。イングラムらしき銃が吊つてある。高峰の記憶では最近モデルチェンジして、低反動になった銃だ。

（装備には金掛かってんだけど、動きが洗練されてないな。チンピラを雇って銃持たせたクチか？）

データをスクロールする高峰の手が、一か所で止まった。

「どうかしたのか？」

いつの間にか横からデータを見ていた島田が声をかける。高峰は地図を見たまま動かない。

「……やられた」

高峰が踵を返す。ロッドを手に取り、ホルダーにはめる。

「白井、一緒に飛んでくれ。ポイントは36224N」

「どうしたんですの?」

高峰は顔をしかめながら拳銃を腰のホルスターに突っ込んだ。

「一人回収してない人がいる」

「え?」

高峰は上条やインデックスのほうを見る。周りは皆、動きを止め、高峰に注目している。

「能力開発に詳しくて、AI研究もしていて、禁書目録のアシストで魔術も行った人物がいる」

上条は目を見開いた。思い浮かぶのは、どう見ても12歳にしか見えない我らが担任。

「小萌先生……！」

「敵さんのほうが圧倒的に近い。白井じゃないと追いつけないだろうな」

高峰は冷静な分析をしつつ、準備を整えた。白井が横に立ち、高峰の肩に手を置いた。

二人が虚空を渡る。他もメンバーを残して。

第17話 回収 (守るべきもの、奪うべきもの) (後書き)

そろそろ三章を終えたいと思います

第18話 敗北 (最悪の事態の覚悟はあったか) (前書き)

会話がないと書きにくいですね。
精進します。

第18話 敗北（最悪の事態の覚悟はあったか）

「ひー、教材作りは大変なですよー」

オンボロアパートの二階から第二次性徴前にしか聞こえない声が漏れる。中では山盛り灰皿こと月詠小萌がちゃぶ台に突っ伏している。

「黄泉川先生もあんまりですよ。なんで警備員アンチスキルの仕事があるからって仕事を回すんですー？」

愚痴る相手は部屋に転がったビール缶というのが悲しい所だが、1人暮らしではしょうがない。

目の前にあるパソコンには黄泉川が押し付けていった生徒の資料が表示されている。この学校のトップ2だそうで、『いい教材頼むじゃん』と言われ、現在、資料と格闘中の小萌先生である。

（こんな疲れたとか、めんどくさいとか、そういうことで仕事を投げ出しては教師失格なのです）

気を取り直して資料を見直す。空気操作系エアロの能力者は専門外だが、任された仕事はやり通す。それは大人の義務だと小萌先生は考える。

（高峰ちゃんと話しをしながら作るのが一番なんですけどねー、本人がいないんじゃないでしょうか）

この教材を使う人を考えながら小萌先生はパソコンのキーを叩く。

そんな中、玄関の呼鈴が鳴った。

「はい、今出ますよー」

この屋根がベニヤ板で補強してあるようなアパートにカメラ付インターホンの高級品なんてあるはずがない。玄関までトテトと歩き玄関ドアを開ける。

「はい？どちらさまですー？」

玄関先にいたのは二人組のスーツ姿の男たちだった。

「月詠小萌さんですね？」

機械のように感情がこつそり抜け落ちた声で男が聞いた。

「そうですね、あの、どちらさまですー？」

男たちは目配せをするとスーツの懷に手を伸ばした。そこからでてきたのは――

銃。

ぴたりと小萌先生小萌先生の頭にポイントして、男はいう。

「一緒に来ていただきます。指示に従ってくれれば、危害は加えません」

「な、え？そんな物騒なもの向けないでください？」

小萌先生は反射的に一步下がる。男たちは一步踏み込んでくる。

ドアや壁、男たちが周りから銃が見えるのを防いでいるらしく、騒ぎは起きない。そもそもこのあたりは学園都市の中でも静かなほうだ。

銃というストレートな脅威に動けなくなり、目を閉じることすら許さない。

ただ涙をぼろぼろ流している小萌先生に男が指示を出す。

「いちらへ」

スッ、と銃を小萌先生から少し離れた時だった。

音もなく金属製の槍が銃に突き刺さった。

「な……っ？」

小萌先生は男たちの顔が驚愕に彩られていくのを見た。その男たちを空気の塊がドアを巻き込んで吹き飛ばしたのを茫然と眺める。

「小萌先生！」

姿を現したのは黒に近い色の装備で身を固めた高峰颯太と常盤台中学の制服のまんまの白井黒子だった。

「た、高峰ちゃん……？」

「けがはないですか？」

高峰に聞かれて、小萌先生はコクコクとうなずいた。

「じゃあ、白井先生連れて飛んでくれ」

黒子が小萌先生の手を取り空間移動する。テレポートフル装備の高峰と白井黒子本人と小萌先生だと空間移動テレポートの限界重量に近くなりすぎ、誤差が大きくなりやすい。そのための対策だった。

「さつてと」

高峰は通路の端まで吹っ飛ばした男たちを調べていく。

銃器はハンドガンにマガジン3つ。

（こいつらも魔術師か？）

装備の中に紙切れがあった。

正円にいくつも幾何学模様が書かれている。

「アラビアの細密画ミニチュアールの応用、か。使われたら厄介だったな」

紙をビリビリと裂き陣を機能させなくした時だった。

『高峰先輩？』

無線機からオペレーターの初春の声が聞こえた。

「どうした」

『トラックから緊急事態警報アラートが出てます。トラックは停止状態、応答がありません？』

「?」

高峰は息をのむ。ともかく戻らなければ。

「初春！」

高峰は踵を返し、無線機に叫ぶ。

「白井に直接オペレーションセンターに行くように指示。俺はこのまま、トラックに戻る」

了解です、という初春の声を聞き、高峰は大きく飛ぶ。

最悪の事態を防ぐために。

高峰は走る。

しかし、ビルからビルへ150キロオーバーで飛び移りながら進む高峰を走ると表現していいものか謎だ。

気圧を操作し空気抵抗を激減させ、減らした空気分、高峰の後ろに回し加速させる。その作業を高速で、かつ莫大な量を瞬間的に演算、実行していく。

大能力者、空気^{エアロ}操作系トップの高嶺颯太だからこそできる技だ。

ビル風や突風を予測し、ねじ伏せる。頭の大部分を演算に使い、必要のない情報は切り捨てる。

慣れた作業だが、焦りのせいかいつもより速度が出ていない気がする。

（見えた！）

高峰はやっとトラックを見つけた（と言っても、実際2分チヨイ

しかたっていないんじゃないだろうか）。ドアが開いて、停止したままのトラックの荷台に飛び降りる。

（クツ……？）

荷台に飛び込もうとしたとき高峰は顔をしかめた。

「このにおい。……ソルフェラミンAか？」

独特の腐卵臭がトラックの中から流れ出ている。ソルフェラミンAは暴徒鎮圧用に使う即効性の神経系ガスだったはずだ。

「ちつくしょうが……ッ？」

高峰は能力を使い中の空気を排出した後、トラックに飛び込む。

電力が落ちて、暗くなったトラックの荷台では人間が折り重なるように倒れていた。黄泉川、上条、島田、美琴……。

使われたのは神経系のガスだったが使われてからそう時間がたっていないようで、皆、呼吸、脈拍ともに安定していた。

「畜生が、……くそっ」

第18話 敗北 (最悪の事態の覚悟はあったか) (後書き)

これで第3章終了です。

はたして特警隊はインデックスを助け出すことができるのか。
楽しみに。

行間3（前書き）

とある人物の回顧録です。

伏線のつもりで投入してみました。が、伏線がすぐに明るみに出てしまいいそうです。

行間3

そのときのイメージとしてあるのは機械のオイルのにおい、誰かの叫び声、原色の赤い絵の具をぶちまけたような色合い。

そして、壮絶な痛み。

「彼」は痛みに脳を喰われながら目の前に広がる惨状を眺めていた。

「父さん、母さん、……クリフォード……ッ？」

「彼」はただ目の前でクシャクシャに潰れている車な中に声をかける。

いくら叫んでも中から誰も出てこない。

「……兄ちゃん？」

スクラップの中から蚊の鳴くような声が聞こえる。

「クリフォード？」

「はは、よかった兄ちゃんは無事だったんだ」

とぎれとぎれに少年の声が聞こえる。「彼」は傷ついた体に鞭を打ち、声のところまで寄っていく。まともに立てない状態だったが後部座席のあったであろう位置にたどり着くことはできた。

「クリフォード、大丈夫か？すぐ助け出してやるから……ッ？」

ボロボロの体を動かし歪んだドアをこじ開けようとする。

「だめだよ。このくるま、さっきから火花がちってる」

「だからなんだ？」

「もうすぐこの車は爆発するかもしれないよ？危険だから――」

「逃げろって言うのか？あんたを置いて逃げろって言うのか、ふざけるな？」

カッとなった頭で「彼」はドアに全体重をかけて無理やりドアを引き剥がした。

「諦めてんじゃねえ？まだ、助かる、助けてやるから……ッ？」

「彼」は叫び、潰れた車の中に手を伸ばす。

指先に温かくぬるりとしたものが触った。見ることはできないがおそらく赤黒い液体だろう。

その奥にあるものに手を伸ばす。触れたのは小さな手。

「助けてやるから、だから、死ぬんじゃない！俺の弟だろうが？」

その直後、「彼」の後ろから誰かが肩をつかんだ。

「君？危ないから下がるんだ？」

畜生、こんなことで諦められるか。

「放せ！この奥にはまだクリフォードや父さんが、母さんがいるんだ」

必死に手を伸ばす。

ドアの奥で、クリフォードが笑った気配がした。

「生きてよ、兄ちゃん」

その言葉の意味を「彼」が理解するより早く。

伸ばした右腕に痛みが走った。反射的に手を引っ込めると車から大人たちに引き剥がされる。

腕の痛みの原因はすぐに分かった。

小さなコンパクトナイフが刺さっていた。柄までべったりと血で濡れたそのナイフはクリフォードが大切にしていたものだった。

行間3（後書き）

次回から魔術サイドの応援を出そうかと思っています。

「とある科学の超電磁砲」のタグをつけてるのに、科学サイドが希薄なような……気にせずこのままいきます。

第19話 増員 (絶望に打ちひしがれる前に) (前書き)

遅くなりましたが投稿です

第19話 増員（絶望に打ちひしがれる前に）

「インデックス……？」

上条の重い呟きが部屋に漏れる。答える声はない。

インデックスが連れ去られた。その事実を上条だけでなく特警隊
全員を打ちのめしていた。シテイセーバー

「こうしてても仕方がないじゃんよ。なんとか助け出すことを考えるんだ」

そういう黄泉川の声も重い。それに頷く島田、白井、佐川。御坂美琴は上条の隣でどうしたらいいかわからないように手持無沙汰でそわそわしていた。

「……逃走ルートを追跡しようとしたんですが、途中で反応が途切れていますね」

初春がパソコンを見せながらいった。インデックスが連れ去られたルートを示したラインが500メートルほど行った地点で途切れている。

「ほかに何か情報はないのか」

そういったのはステイルだ。インデックスを守れなかった自責の念か、何かをこらえるように言葉が漏れる。

「いま官民双方のセキュリティネットワーク全体を走査しています。でも、それと言って有力な情報は……」

重い雰囲気は払拭できず、重々しい沈黙が部屋を支配していた。

「追うほうは特襲隊レイドフォースのほうがやってるんだよね？」

高峰はチーフポケットから取り出したコンパクトナイフを弄もてあそびながら声をかける。

「そっちにはもう連携体制をとっているんですが、そっちもまだ情報を掴めてないようですよ」

初春の声を聴きながら高峰はこの部屋——コントロールルームの時計を見上げる。

「もうすぐ連れ去られてから1時間半か、……そろそろ敵さんもアクションを見せるかな」

高峰の言葉に全員の視線が彼に集まる。

「高峰、どういうことだ？」

上条が立ち上がり、高峰に詰め寄った。

「初春、トラックが襲撃された時の映像出せるか？」

「え？あ、はい！ちよつと待ってください……………出ました」

小さなマルチスクリーンにトラックについたカメラの映像が現れた。

「『ペリカンの翼』は突入したとき、なぜ上条たちを殺さなかったのでしょうか？」

トラックの中の映像を流しながら高峰は声を響かせる。

「インデックスを殺さないように暴徒鎮圧用に開発されたソルフェラミンAを使ったのは説明がつきます。でも、彼らにとって利用価値のない特警隊^{シテイセーバー}まで殺さず、まして脅威でしかない『幻想殺し』^{イマジンブレイカー}上条当麻を殺さなかったのは納得がいきません」

黄泉川が口を開く。

「つまり、敵さんは私たちを利用して何かをしようとしている、と？」

「その可能性は高いと思います。上条を殺さないことでインデックスに『逆らったら上条を殺す』と脅しをかけて、従うように圧力をかけつつ、逆に『逆らったらインデックスを殺す』と圧力をかけることで、我々の動きを牽制しようとしてくるでしょうね」

「となると……」

後を継いだのは佐川だ。コンピュータを操作しながら言う。

「近いうちに接触してきますね、……っ」と

「？ どうした？」

いきなり言葉を切った佐川に黄泉川が声をかける。

「理事会から連絡が来てます。——協力者が来たのでそちらに送る——とのことです。……協力者って誰でしょう？」

佐川の言葉には意外なところから答えがあった。

「僕が『必要悪の教会』^{ネセサリウス}から応援を呼んだ。その応援が到着したんだろうよ」

ステイルだった。今さっき小萌先生に噛みタバコまで没収されて不機嫌なまま言った。

誰が来るんだろう、と高峰があれやこれや考えているうちに、その助っ人がやってきた。

「もう、学園都市の飛行機には乗りたくないのよな……」

「科学って進歩しすぎてる気がします……」

そついいながら現れたのは一組の男女。

天草式の建宮斎字と五和である。

「ほう、てつきり神裂火織あたりが来るもんだと思ってたぞ」

高峰がそういうと、五和のほうが苦笑いして言った。

「女教皇様は今ロンドンで自分で作った梅干しでおなかを壊して動けなくなってます」
フリエステス

「……梅干しでおなか壊すってどんな材料使ったんだ……？」

上条がげんなりして呟くと五和が『ははは……』と笑った。そんな五和の袖を建宮がちよいちよいと引っ張った。

「（……五和、チャンスなのよ。インデックスがいない間に距離をつめておくのよな。宿敵を助けることには不満たらただが、ここで活躍して好感度をアップするのよ——？）」

「（はい！頑張ります）」

ちなみに二人には上条の隣に学園都市第三位の常盤台の超電磁砲がかなり強敵であることをまだ知らない。

追加メンバーも集まって、シテイセーバー特警隊は魔術的なことも含めてもう一度情報を見直すことにした。

「ここ、何か痕跡を消したような感じがしませんか？」

そんなことを言ったのは、犯人たちの追跡が途切れた所の写真を持った五和だった。

「……スペイン式の十字教、いえ、南米のスペイン語圏系のアレンジのようですが……」

「『エマオの奇跡』がもとのようにおもつものよ」

新参者2人の意見にぼかんとする科学陣営。

「あの……高峰先輩。それって……？」

おそろおそろ声を開上げたのは初春だ。

「うん、魔術の一つだな。姿を消したように見せる魔術だ。気配は消せないはずだが、今回の場合かなり正確に消してる」

「かなりの術師がいるな」

魔術サイドからサラサラと答えが返ってきて周りはそんなもんなのかと思ってしまう。

「そういえば高峰先輩って魔術士なんですよね？」

続けて初春。

「じゃあ、ゲームみたいに魔法が使えたりするんですか？」

頭をかく高峰。

「うーん。自分の専門は鍊丹術、特に内丹だからなあ。肉体的、精神的治療は得意中の得意だけど戦闘向きではないな。……なあ、建宮、サーチ系の術式ってここで使うとどれぐらいの精度で出せる？」

「……実用的には距離が半径10キロ圏内、誤差±5メートルってとこだな」

「じゃあちよつと組んでみてくれないか？機能は停止してあるが自_ヨ動書記と魔術の流れを見てくれ」

了解、と天草式の二人が動き出した時だった。

上条の携帯が鳴った。

画面の表示はインデックス。

第19話 増員（絶望に打ちひしがれる前に）（後書き）

今回は時間をかけた割に面白くないかもしれません。

次こそ、次こそ……ッ！

第20話 電話（新たなる絶望の始まり）

上条の電話が鳴った。

「?」

上条が慌てて電話に出ようとしたが、高峰が止めた。

「ッ? ちょ、なにすんだ?」

高峰が携帯を取り上げるとそれを何やらスタンドに置き、上条にマイクを渡した。

「録音するからな」

高峰がそういつと初春に合図をだす。初春はすぐにOKサインを出した。

全員に聞こえるようにスピーカーから電話の音が流れ出す。

『上条当麻君』

機械で合成された甲高い声が耳に残る。

「てめえ、何者だ?」

『わかりきったことを言わないでほしいね。《ペリカンの翼》さ』

笑いを含んだ音声はしんとしたコントロールルームに響く。

「インデックスは無事なのか？」

『安心したまえ。殺すつもりはないよ。なんたって10万3000冊の魔導書図書館だからね』

「……要求はなんだ」

上条の言葉にスピーカーの声は笑ったまま答える。

『話が早くて助かるよ、上条君。こちらの要求は簡単だ。なんだと思っ？』

スピーカーはそもそも上条の答えを期待していないようで、一秒も間を置かず答えを言った。

『9月30日に現れた《天使》の核があるのだろうか？それを持ってくるか、連れてくるかして、それを我々の前で破壊してほしいんだ。きみの右手ならできるんだろう？』

上条は歯噛みした。9月30日に現れた《天使》の核——それはインデックスの『ともだち』風斬氷華を殺せということだ。

「……そんな要求？めるか」

『そうかい？それはインデックスが返ってこないということになるけど』

「……ッ？」

コントロールルームは静かになる。初春がパソコンを操作しているらしく、キーボードを叩く音だけが響く。

『そうそう、彼女の《自動書記》^{ヨハネのペン}がロックされてるみたいだけど、ついでだからその解除霊装も持ってきてもらおう』

高峰がフリップボードにマジックを走らせ上条に見せた。

「……インデックスの無事を確かめたい。話をさせてくれ」

『……いいよ。少し待ってくれな』

スピーカーから雑音が漏れる。変成器を外しているらしい。

「（初春？逆探は？）」

「（ダメです。ジャミングがかかってて判別できません！）」

「（ジャミング？）」

「（追跡機が外部から中断されたんです。かなりの使い手ですね）」
トレーサー

「（続けてくれ）」

高峰と初春がそんなやり取りをしているとスピーカーからノイズが消えた。

『……………とうま？』

弱々しい少女の声が聞こえる。

「インデックス？大丈夫か？」

『私よりも……………とうま達のほうこそ……………』

「こっちは大丈夫だ。がんばれよ。すぐに助けてやつから」

無事だったことに安堵しつつ、声が弱々しいことに猛烈な心配を覚える。

『うん。……………まってる。……………あ』

インデックスの声が唐突に途絶えた。また合成音声に戻る。

『そういうことだ。健気だねえ』

上条の手にあるマイクがミシリと音を立てた。

「てめえ、インデックスに手をだしやがったら……」

『ただではおかないって？それは君たちしだいだよ。そうそう』

楽しげな合成音声が笑う。

『タイムリミットは設定しないでおうか。でも彼女のことを考えるなら早いほうがいいだろう。そうだな』

スピーカーの声は笑い、告げた。

『君たち、テストメント学習装置ツテ知ってるかい？』

科学陣営は——凍りついた。

「貴様、それを使う気か？」

『だから君たちしだいだって。まあ、遅くなればなるほど、我々を待たせるほど可能性は高くなるっと思ってくれ。それではよい決断を』

それで電話が途切れた。

魔術師たちは凍りついたままの能力者たちにおそろおそろ声をかけた。

「テストメント学習装置って……？」

それに答えたのはこれまで黙って聞いていた、小萌先生だった。

「能力者さんの開発に使う装置ですよ、薬物を投与した後、微弱な電波を脳に流して情報を強制入力するのです」

「さて、そんなものを彼女に使ったら……」

ステイルの言葉に高峰は重々しく答えた。

「ああ、そんなものをインデックスに使ったら、彼女を能力開発することになる。元々彼女には魔力を練る力はないから日常生活には問題ないだろうが、ヨハネのペン自動書記は間違いなくアウトだな」

「それだけじゃないわ」

御坂が口を挟んだ。

「ペリカンの翼とやらはあの子の頭の中の知識を狙ってるんでしょ？ そしたら、テストメント学習装置を使えば無理やり知識は取り出せる」

「そうなれば、彼女を生かしておくメリットは限りなく少なくなるな」

高峰の言葉に上条は奥歯が砕けるほど強く噛みしめた。

「上等じゃねえか……」

右手が、イマジンブレーカー幻想殺しの宿る右手が強く強く握られる。

「これ以上インデックスを巻き込んで苦しめるって言っんなら」

胸にあるのは、決意。そして強い怒り。

「そんな幻想、すぐさま跡形残らずぶっ殺す？」

第20話 電話（新たな絶望の始まり）（後書き）

これからもっと更新が遅くなることが予想されます。
気長にお待ちください。

第21話 進展（向かう先は絶望か希望か）（前書き）

「なア、作者。二か月以上放置しっぱなしたア。どオゆうこったア？」

——ええつとですねえ、まあ、忙しかったんですよ。模試とか定期考査とか風邪とか部活とか。

「それ、言い訳にもなつてねエって知ってンだろうなア」

——と、言いますとなんでしよう、アクセラレータ一方通行殿

「あんたが『魔法少女リリカルなのは』なんつー作品にうつつ抜かしてのはもう知ってンだよ、作者ア。それにはどう言い訳する気だア？」

——……………すいませんでしたああああああツツツ！！

「謝る相手を間違えンじゃねエぞ」

——ちよっ！？アクセラレータ一方通行さん！？その手を首筋の機械から外してくださいませんか？

「あア」

——もうベクトル使用モード！？待つて待つて待つて！謝るから謝るから、超笑顔で殴ろうとするのはやめ……ああああああああああああ！！

「ふん、こんなもんかア？作者がどつか逝っちゃったから、作者の代わりに言うア。遅れてすいませんでした、と作者からだ。あのクソツタレをもう一度殴っとくから、許してやってくれよオ」

以外に一方通行さん優しい？なんて思った夏の自転車は彼にボコられましたとさ（笑）めでたしめでたし。

ほんとにすいませんでした。久々の更新です。

第21話 進展（向かう先は絶望か希望か）

いきなりドアが開いた。

中にいた少女はうつろな瞳をドアのほうに向ける。

そこにいたのはいつもお世話になっている医者——とぼけたようなカエル顔をしている——が入ってきた。

「君に協力してほしいって人がいてね？会ってくれるかい？」

困ったような顔でそういう医者に少女は表情を一切変えず頷いた。

「構いません、とミサカは肯定します。このタイミングということ
ラストオーダー
は最終信号についてでしょうか、とミサカは確認を取りつつ首をかしげます」

少女——ミサカ10032号はベッドに入り点滴につながれたまま、体を起こした。半日ほど前、いきなり、何者かがミサカを襲い、戦闘した後なので、調整中なのだ。

カエル顔の医者は頷いて、入ってくる面会者に道を譲った。

「久しぶりだなア、ミサカ10032号」

カッカツと杖を鳴らして入ってくるのは白い髪に赤い目をした学園都市最強の超能力者。

アクセラレータ

一方通行

以前、ミサカの仲間を10031人殺害し、ミサカ10032号と刃を交えた『元』敵。

ラストオーダー

「上のほうから打ち止めを回収してこいつて指示が出て指示が出てンによオ、情報一つもよこして来ねエから直接聞きに来た。あのガキ助けたいなら協力しろ」

アクセラレータ

ベッドの横に立った一方通行は御坂妹を見下ろすようにして笑う。

「怯えた目をしてんじゃねエよ。別に殺しに来たわけじゃねエ」

「その子は戦闘の後で治療中なんだよ？無理させないでくれないかい？」

ドアの横に立ったままの医者が第一位を窺めるように言った。

アクセラレータ

一方通行は舌打ちすると、ベッドの隣のパイプ椅子に座った。

ラストオーダー

「最終信号からあなたには全面的に協力するようにと言われています、とミサカは事実を伝えます」

「——あのガキから何か連絡があつたのか？」

アクセラレータ

一方通行の目は真剣そのものだった。御坂妹は頷く。

「『ミサカがあの人に解放されるまで、ミサカからのすべての命令を拒否するように、ってミサカはミサカは司令官らしく危機的状況に対策をとってみたい』とミサカは一字一句間違えず伝達します」

「ガキの場所はわかるか？」

アクセラレータ

結論を急ぐ一方通行に御坂妹は目をつむる。

「——46分32秒前に一度命令がありました、とミサカ

オーダー

は返答します。この時の信号に位置情報が含まれていました、と重要事項を伝えます」

「場所は？」

御坂妹は虚ろな瞳を一方通行に向ける。
アクセラレータ

「第21学区、工業用電力第三分電所、と最終信号^{ラストオーダー}の居場所を正確に教えます。どうか彼女と私たちを助けてください、とミサカ10032号は心中を吐露します」

「——さっきの電話を解析しました」

コンソールを叩いていた初春が告げた。

「発信場所は特定できませんでした。電話はプリペイド式の携帯電話で盗難届が出ているものでした」

「まあ、それは予想通りだな」

腕を組んで唸るのは高峰だ。そのあとに上条が続く。

「ほかに情報はないのか？」

「電話に入っていたノイズを解析しました。今、スピーカーで流しますね」

初春がコンソールを叩くと唸るような音が聞こえてきた。

「これは——」

「タービン音？」

黄泉川の言葉に初春が頷く。

「間違いなく工業用のタービンの駆動音です」

これは有力な情報だ。

「これで場所が大分絞り込めますね」

高峰の隣でそう言うのは島田だ。それを聞いて佐川がコンソールを叩く。

「現在タービンが使われているのは第二学区で三三か所、第一七学区で四二か所、第一九学区で三か所、第二一学区で五か所、第二三学区で四か所の計八六か所ですね」

「まあ、学区が大分しぼりこめたんだ。ちょっと数が多いけど何とかならない数じゃないじゃんよ。しらみつぶしに探すほかないじゃん？」

黄泉川の言葉に上条がうなだれる。どれだけ時間がかかるのか？
それまでインデックスは大丈夫なのか？

「安心しろ、上条。アンチスキル警備員も全面協力するんだ。二時間以内にすべての搜索が進むさ」

高峰の言葉に上条が力なくうなずいた。

「それともう一つ報告したいことが」

初春の言葉に皆が注目した。

「この事件に幻影使いが絡んでいる可能性があります」
ファントムマスター

ファントムマスター？と魔術陣営が要領を得ない顔をした。

島田が恐る恐る口を開く。

「……確か、第一級のハッカーでした、よね？」

「はい。暗号化ソフト『オメガシークレット』の開発者であり、あまたの企業から依頼を受け、合法・非合法問わず活躍する超一流のハッカーです」

「で、なんでその幻影使いが絡んでるってわかるんじゃない？」
ファントムマスター

黄泉川言葉に初春はパソコンを見せながら言った。

「幻影使いからわたし宛にメールが届いたんです。学園都市のセキュリティシステムに直接」
ファントムマスター

パソコンの画面には一つの文面が映し出された。

Dear 初春飾理

だいぶ腕を上げたじゃないか。きみの善戦を期待する。
フアントムマスター
幻影使い

「初春と彼はどういう関係なんだい？」

表情を硬くした高峰に初春が答える。

「師匠と弟子……でしょうか。わたしのハッキングテクニックはフアントムマスター影使いから教わったものですから」

「ってことはどこの誰だかわかる？」

黄泉川の言葉に初春は首を振った。

「ネット上でしか話したことはないです。顔も素性も性別すらわかりません」

そう、か……と、黄泉川が残念そうにうなずくと初春はパソコンを操作した。

「今、このメールの発信元に追跡機トレーサーをかけてます。もうすぐ反応が

来るかと思いますが……」

この時、シテイセーバー特警隊の面々は知らなかった。

逆転のカギがすぐそこにあることを。

第21話 進展（向かう先は絶望か希望か）（後書き）

また、1〜2か月ほど空くかもしれません。必ず更新しますんで
長に待ってくださるとうれしいです。
それでは、夏の自転車でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7998p/>

とある組織の気圧制御（エアロウォール）

2011年7月29日23時52分発行